335
13

文學博士 前田慧雲先生序

文學士 北村敎嚴先生著

生死問題

東京書肆 青野文斜堂

宮内省圖書寮

生死問題附錄

省錄

明治
40 3 2
宮内

序

辱交北村敎嚴君は、年齒尙壯にして、道心堅固、溫厚篤學の人なり、頃者信仰に關する論草十數篇を蒐めて生死問題と名け、來りて予に示めし且つ序を寄せんことを請ふ、予卽ち快諾して徐ろに之を觀るに、着想穩健にして理屈に偏せず、感情に流れず、毫末も浮誇炫燿の嫌なくして、而かも句々哀情より出つるを以て、頗る讀者の肺肝を穿つものあり、眞に君が造詣の深きことを識るに足

る、天下求道の士、此書を以て座右の伴侶となさば、精神修養に稗益する所蓋し鮮少にあらざるへし、聊か鄙辭を陳して斯かる好著の出てたるを喜ふ。

文學博士　前田慧雲　識

自序

宗教は人生の最大要件なり、宗教なくしては吾人は一日も起居すること能はざるなり、而るに宗教に對する世人の態度一樣ならず、未た自から宗教の必要を感せざるものあり、自から必要を感しながら未た進で求むるに至らざるものあり、進て求めて未た得ざるものあり、斯の如き狀態は凡そ幾何ありや知るべからす、是れ皆な人々の性情境遇職業等に因るべしと雖ども、機會の有無多少に關すること最も大なるへし、機會を得たるものは宗教心を生じ易く、機會を得ざるものは宗教心を生じ難し、若し好機會に處して信仰確立するに至らば、如何なる刺擊に遭遇するとも決して信仰

の動搖せらるゝことなし、他によりて動搖せらるゝが如きは、未だ確信を得たるものとは謂ふべからず、去れば確信を得んと欲する人は、成るべく多くの好機會に接觸して修養を重ねんことを要す、是れ實に宗教を得るの最大要件なり、予不德不學なりと雖とも、平素宗教に心を寄すること鮮なからず、乃ち感に乘じ興に應じて錄し置きたる草稿十數篇を擇びて一卷となし、生死問題と名けて之を世に公にし、以て自他修養の機會に供せんと欲す、諸兄諸姉願くは予が僭越を咎むることなかれ。

明治四十年二月上旬

著者識

生死問題

目錄

第一章　基督の說法と釋尊の說法……一
第二章　無條件の愛……八
第三章　救の聲……一五
第四章　信仰ある生活と信仰なき生活……二二
第五章　人生と宗教……三〇
第六章　人性と佛性……三七
第七章　逆境に處するの勇氣……四四
第八章　主義より來る力……五一
第九章　自信力……六五

第十章　自然の趣味と人生の趣味……七八
第十一章　理想の實現……八七
第十二章　無限の生命……九五
第十三章　無我的道德……一〇一
第十四章　厭世觀……一〇七
第十五章　苦痛觀……一一五
第十六章　融通無碍……一二三
第十七章　道德の制裁……一三〇
第十八章　靈魂の不滅……一五二
第十九章　釋尊の人格……一九六
附錄　自省錄

生死問題

文學士　北村教嚴著

第一章　基督の說法と釋尊の說法

己れの奉ずる宗教のみは眞理なれども他の宗教は悉く邪教なりと思ふのは餘り偏頗なる了見である、如何なる宗教なりとも、苟くも人々が自己の生命を托する程に信ずるに至るには必ず其の教理に人を感動せしむる丈の力があるからである、去れば、たとひ外教なりとも取りて以て自己の信仰に資する所あらば、大に玩味すべき必要がある、是に就て差し當り思ひ立ちたるは、路加傳に於ける基督の說法と、法華經に於ける釋尊の說法である、先づ前者から話して見よう。

或る人にふたりの子あり、その弟、父に曰けるは、父よ、わが得べき財産をわれに分け與へよと、父は財産を彼等に分け與へければ、幾日も經ざるに、弟すべての物を集め携へて遠國に旅行せり、そこにて放蕩の爲めに、その財産をみな費せり、盡く費せし時、その地に大饑饉ありて乏しくなり初めたり、遂にその村の或る人に往き身を寄せたれば、其人豚を牧ふ爲めに彼を野に遣はせり、彼れ豚の食する莢豆を食はせられんことを希へども誰れも與ふるものなし。

是に於て自から良心に反りて曰けるはわが父の許には食物に餘れる傭人の幾多かあるに、われは是に於て餓死せんとす、われ起ちて父に往きて言はん、父よ、われ天に背き、且つなんぢの前に罪を犯せり、既に汝の子と稱へらるゝに歟らず、たゞ傭人の一人の如くなし玉へ、即ち起ちてその父に歸りしかば、なほ遠く隔れる時、父かれ

を見て憫れみ走り寄りて、その頸を抱きて之れに接吻したり、さて其の子曰ひけるは父よ、われ父に背き且つ汝の前に罪を犯せり、既に汝の子と稱へらるゝに歟らず、唯だ傭人の一人の如くなし玉へと、去れど父はその僕に曰けるは疾く最も美服を持ち來りてかれに着せよ、指に環をはめ、足に靴を履かせよ、且つ肥たる犢を牽き來りて屠れ、わが子死して甦へり、失ひてまた得たれば、われら食して樂しむべしと、遂に樂み初めたり。

その時兄は畑に在りしが、歸りつゝ家に近づき、音樂と、舞踏との音を聞き、その僕等の一人を呼び斯は如何なる事ぞやと問ひしかば、僕かれに曰けるは、汝ぢの弟歸りたり、父彼れを恙なく受けしに由りて肥たる犢を屠りたるなりと、兄怒りて家に入らず、故に父出でゝ彼れに勸めければ、父に答へて曰けるは、見よ年久しく我れ汝に

事へて未だ命に背きしことなきに、汝ぢは我が朋友と樂むために我れに一疋の羊をも與へしことなし、然るに娼婦と偕に汝の財産を費せし汝の子の歸るに臨み、彼れの爲めに牘を屠れりと、其の父彼れに曰けるは、子よ汝は恒に我れと偕に在り、且つ我が所有は悉く汝の物なり、汝の弟死して甦へり、失ひてまた得たるが故に、我等樂みて喜ぶは宜べなりと』（露加傳第十六章）

讀者諸君此の文を見て如何に感ぜらるるか、是は基督の說法なりと雖も、惡人を正機として攝取して捨てずと誓ひ玉ふ如來の慈悲、活躍として現はれて居ります、惡人なるが故に彌陀は大悲を起し玉ふのである、我等は罪業の深きことを自覺して、一心に彌陀に歸命すれば、彌陀は必ず我等の死して甦へりたることを喜び玉に相違ない、心を弘誓の佛地に樹て「パイブル」を眺むる時は、基督の片言雙語の間にも如來の慈悲を

明かに認むることが出來るのである。

是れに頗る類似したるものを佛典中に求むれば法華經第四卷信解品に說てある長者窮子の譬喩である、佛弟子舍利弗が、求めずして妙法を聽くことを、得たることを、佛陀に謝し奉るに一の譬喩を以てせり、

或る富豪の息子、幼にして父を捨て諸處に轗軻漂落すること五十年に及ぶ、父は深く之を悲しみ百方之を搜索すれども得ず、乃ち一都會に大厦高堂を新築して切に我が子の到るを俟つ、窮子身に襤褸をまとひ、食を此の都市に乞ふて偶ま大富豪の家に到り、門に立ちて竊かに伺ひ觀るに、主人は儼乎として獅子座に在り、吏民僮僕多く其の周圍を衞る、窮子は父の甚だ威力あるを覩て、是れ或は國王の家にて、忽ち縛せられて苦役せられんことを恐れ、驚き走り出づ、父は遙かに我が子の歸りたるを識りて心中大に喜び、人をして

追て捕へ來らしむ、初めは頗る下賤の役を命じ、次第に主人と慣るゝに及で擧げて家事に與からしむるに至る、斯の間二十年なりき、而して窮子は未だ其の實の父、たることを知らざるなり、老父途に病に罹り、豫て貯蓄せる所の金錢財寶悉く子に讓らんと欲す、命終の時に臨み、國王大臣及び親戚を會して曰く、是は眞に我が生みし子なり、幼時吾を捨てゝ逃走し、貧賤に苦むこと五十年にして再び歸へり來れり、吾が幸福何物か之に加へん、今や吾れ死期に臨て家實を擧げて此の子に讓るべしと、窮子父の遺言を聞き、本來自心に求むる所なくして實藏の自然に至るを念ひ、歡喜すること限りなし（取意抄譯）

如來と衆生との關係も亦た是れに異なる所がない、如來は大悲を以て我等に與ふべき一切の功德を成就し玉ひたりと雖とも、衆生之を知らず

して如來と遠かり、法を或は右に求め或は左に聞き益々迷途に彷徨せり、如來は愈々之を憫れみ玉ひ、種々なる方便を盡して勝功德の既に成就しあることを我等に知らしめんとし玉ふなり、我等偶々如來の方便に乘られて如來に近づき、如來を信じ得たる途端に、彼の勝功德は總して我有となるなり、釋尊一代の說法頗る繁多なりと雖とも、要は如來の勝功德を我等に知らしめん爲めに外ならず、我等は如來の敎法を知らず、釋尊の本懷を辨せずして生死の巷に彷徨し、自から苦惱を招けることは、恰かも富者の子の父を離れて却て貧里に迷ふと異なることはない、誠とに愚なる次第である。

斯の如く聖書を繙きても如來の深恩を感謝する種となすことが出來る、法華經を觀ても亦た同じである、前者は衆生の罪惡の深かきことを顯はし、後者は衆生の愚痴の劇しき事を示めして居る、而して何れも終

に如來に歸して救はるゝことを觀ることが出來る、去れば外敎の書物を讀みても佛の心を失ぬ樣にして居れば、其の敎は皆な吾物となりて來る、是れは信德の然らしむる所である。

第二章　無條件の愛

世の中に最も必要なるものは愛の道なり、君臣父子夫婦朋友の間は皆愛を以て結ばるるなり、彼我の間に愛情の存するに依りて交際も溫かに成り、心底より打ち解くることを得て、快濶なる間柄ともなるべきなり、愛情の缺ぼたる交際は、無味干燥にして何等の趣味をも其間に見出すこと能はず、世間普通の交際は多くは表面一樣に過ぎざるものゝ如し。

然らば愛とは如何なるものぞと云ふに、至誠を盡して他に對するのみ、

至誠を盡して他に對するとは、毫末も他に對して求むる心のなき事なり、他より報酬を得る爲めにもあらず、他より稱贊を得る爲めにもあらず、唯だ々々同情を以て他の利益を計るのみなり、斯の如き至誠を以て他に對すれば他も亦た至誠を以て我れに對するに至るべしと雖も、寧ろ是れ自然の結果として生ずるものなり、求めて得る所のものにあらず、或は愛の德によりて社會の尊敬を受くることもあるべし、或は高位に就くこともあるべし、或は巨萬の富を積むこともあらん、然れども是れ皆至誠を以て他に對せし結果として自から得たる報酬なり、最初より此等の報酬を得んことを豫想して爲す所の愛は未だ眞實の愛にはあらず、而して報酬を求むる心にも强弱大小の等差あり、慾求心の弱小なる丈け愛の道に近づき、慾求心の强大なる丈け愛の道に遠ざかる、純粹至誠より發する愛は全く無條件なり、自己の念頭に何等の條件をも

豫定することなし、之を眞誠の慈善と云ふ、之に反して自己の胸中に何等の至誠もなく、唯だ報酬をのみ目的として施す所の愛は既に自己の念頭に幾多の條件を豫定せるか故に之を僞善と稱するなり、世間普通に謂ふ所の愛若くは慈善とは多くは此の兩極端の間に來往せるものなるべし。

無條件の愛は、他の危急なるを見て我れ之を救ふ事ありしに他は我に對して何等の感謝の意をも表せずとて決して怒る事をなさず、又後日我が危急に陷たる時に際し他は我をも救はずとて我れ之を恨む事をなさず、寧ろ他の心の至ざるを觀て、益々他を憐愍するの情を增さしむるなり、斯の如き愛は邊際を識ること能はず、彼れ我が愛を感得せずして、却て我れを仇讐の如く見做すことあるも我れは泰然自若として、益至誠を以て彼れに對する時は、彼れは必ず我が至誠によりて感動せらるゝ

の日あるべし、若し他の心の至らざるを觀て、或は怒り或は恨む情の動くことあるは、我が愛の純粹至誠より發動せざるの證據にして、我が愛の或る程度迄局限せられたることを示めせるものなり、我れは愛を行ふに當り無意識的に若くは意識的に或る條件を念頭に印しつゝ他に對するによる、心中竊かに求むる所ありて得られざる故へ怒り恨むの情の起るなり、最初より豫定する所なき時は、結果惡しければとて已のが意志に逆らふと云ふことなし、已が意志に逆ふ所なき故に他を責むる心なし、他を責むる心なき故に怒り恨むの心も起らざるなり、是を以て無條件の愛は即ち無限の愛と謂ふを得るなり。

然れども斯の如き愛は、人間社會に於ては殆んど發見することを得ざるなり、意識的若くは無意識的に人間の愛を施すや、必ず何等かの報酬を豫想せざるはなし、是を以て如何に愛情の深き人と雖も、被愛者より

相當の敬禮を拂はざる時は、必ず不快の念を生するに相違なかるべし、是れ愛を行ふ時に當り、少くとも敬禮だけなりとも他より拂ふべきことを豫想せしに依る、而るに結果は豫想と齟齬する故に、忽ち不快の念の生する也、然れは無條件の愛は人間社會には到底あり得可らず、然れとも吾人は無條件の愛と云へる最高理想を有せり、而して吾人は斯の如き理想の實現せん事を望めることは事實也、然らば斯かる最高理想の實現は何處に向て求む可か曰く絶對者即ち如來の外なきなりと。

如來の一切衆生を愛し玉ふには、何等の求むる所ましまさゞるなり、衆生の如來を禮拜せざるも怒り玉ふことなく、如來を信せざるも、又念佛申さゞるも、決して恨み玉ふことなし、寧ろ斯の如きものを却て愛憫し玉ふなり、且つ又た吾人は平素一の善行をもなすことなく、惡事のみを積み重さぬるも決して責罰を下し玉ふことなし、恰も水の低きに流るゝ

か如く、吾人の罪の深き程如來は愛を深く垂れさせ玉ふなり、惡人を救ふ爲めの如來の活動なり、惡人は如來の正機なり、如來の御心に叶ふものゝみは救はれ、如來の御心に叶はぬものは救はずとせば、如來の愛に條件あり、故に如來の愛は有限なり、而れとも如來は一切衆生を一子の如くに愛し玉ふなれば、善惡邪正の隔てはなし玉はざるなり、如何なる惡衆生と雖も如來の愛に漏るゝものなし、是を以て如來の愛は無條件なり、故に如來の愛は無限なり、之を如來の大慈大悲と云ふ。

大慈大悲は即ち博愛なり、博愛には責罰なし、己が意志に叶はぬものに責罰を與ふるか如きは、決して博愛にはあらざるなり、何となれは斯の如き愛は一方に偏局する所あり、故に博愛とは云ふべからず、又た如來の大慈悲は即ち至誠なり、至誠は必ず人を感動せしむ、如來の至誠に感動せられ、如來の愛の無限なることを感得したるときは、即ち是れ救濟

せられたるの時なり、是れ以外に救濟の事實を發見すること能はず、彼の絶待者の責罰を恐れ其の脅迫に促かされて肯從するか如きは決して救濟には非ざる也、救濟は無條件の愛に依りてのみ營まるゝ也。

如來の愛の外に無條件の愛はなし、是を以て天地の間に如來の心を除きては至誠なし、如來の愛は天地の間に遍滿せり、去れば如來の愛を頼まずしては吾人は一日も生活すべからず、吾人は常に父母の愛を頼み、親戚鄕黨の愛を頼み社會の愛を頼み、政府の愛を頼まんと欲せり、是等の愛を頼むことは一概に不可なりと謂ふにはあらず、又た大に頼むべき必要もあるべし、然れども人世に於ける斯の如き愛は全く無條件なりや、吾人は自己の不注意によりて、忽ちに親戚朋友の愛を失ひしことなきや、吾人は他の愛を求むるなくして純粹に他をのみ愛することを得るや、我は他を愛せしに、他は我を愛せさるに於ては、以前の愛は次第

に減退することなきか、斯の如きは到底吾人の實行し能はざる所にして、又た人情の已むを得ざる所なり、是に於て吾人は益々如來の愛を有り難く感ずるなり、如來の愛を感ずることによりて初めて天地の至誠を了解することを得たり、吾人は眞面目に人世を觀察することにより、愈々深く如來絶待の力の無限なることを知れり、是に至りて予は斷言せんとす、人世の愛をのみ頼みて、而かも如來の愛を頼まざるの人は、人間中最も不幸なるものなりと、其故は斯の如き人は、未だ天地の至誠を了解せざる人なればなり。

第三章　救の聲

世間には往々佛敎を彼れ是れ批難する人があつて、或は佛敎は厭世敎である、社會に害があるから近づかぬがよいと謂ひ、或は佛敎の道德は

消極的で、人道に益がないから用ゆべきでないと謂ひ、或人は佛教は三、千年の昔し釋迦が印度に出でて始めて說き弘めたるものなるが、其當時には大切なりしか知らねども、二十世紀の今日に於て斯かる教を奉することは、迂愚の甚しきものであると謂ふものもある、其他一一數へ擧くることは出來ざれども是等は何れも盲人等の象を撫でゝ批評せしと云ふ喩と同一で、吾々信者より眺むれば斯かる攻擊は三文の價もないものである。

自分は或る朝一人の泥醉者の往來に横臥して居たのを見た事がある、定て前夜出稼の戻り途にて居酒屋にて濁り酒でも澤山飲み過ごし、我家に歸らんとしても足も碌にきかず、東西の方角も分らなくなつて、遂に其儘横に仆れてしまつたのであらふ、而して宿醉は未だ醒めず、人馬の來往の騷がしきをも識らずして、今尙熟睡して居つたものらしい、丁

度其時數歩先きに通りかゝつた人があつて、件の泥醉者を呼ひ起こして、一言二言注意を與へた所が、其男はムックと跳ね起きたから、お禮を云ふと思ひの外、却て種々管を卷て罵り散らし、果ては怒て世話して呉れた恩人を手を上げて擲たんとする有樣なりしが、幸ひ巡査の制する所となりて大事に至らずして止んだ、世にはこういふ情けない人もある、若し何時迄も呼ひ起す人が無かつたならば、馬足に踏まれ車輪に牽かれ、どんな怪我をしたかも知れぬ、去れは呼ひ起こしたのは人の慈悲である其慈悲を慈悲とも思はず、却て仇敵の樣な振舞をなすとは如何にも喩へ方なき人非人と謂つても宜しからふ。

我等一切衆生と釋尊との關係も亦た丁度斯くの如き有樣にて、我等一切衆生は無始曠却の昔より、無明と云ふ恐ろしい酒に醉ふて、此の酒の中毒は、仲々以て「アルコール」の如き比ではない、何億萬年とも知れぬ長

き間、暗から暗に、迷から迷に、轉輾して生死の巷に彷徨はしめた大毒酒である、人間の一生も此の中毒の御蔭で、此か爲めに一切の煩惱は燃え立つ樣に起り來り、怒る程のことなきに怒り、恨む程のことなきに恨み、邪推、疑念を挾み、怨恨不平の念は絶ゆることなく、自から氣を疲らし心を苦むることが幾許あるか知れぬ、又た或る時は人の名譽を羨み、或る時は人の地位財產を羨み、野心は勃々と動き來り、東奔西走、之を求めんことを勉めて居る、偶〻求めて得れば更らに足ることを知らず、層一層我欲自利を滿たさんことを勤め、社會國家人類に對し、自のが果たすべき天職あることをも忘却して敢て、恥づることを知らぬ樣になる、若し不幸にして思ふ樣に求め得ざる時は、失望落膽して慰安を得る道なく、果ては嫉妬となり猜忌となり、怨恨となり、人を罵り、他の事業を妨害し、以て胸中の宿鬱を晴らさんとして居る、何と淺間しき次第ではないか、

人世を表面より眺むるときは、誠に美麗なる樣なれども、裏面より仔細に觀察するときは、醜穢にして耐ゆへからざるものである、總ての罪惡、總ての災禍、總ての病源は悉く裏面に包まれて居るものである、而して此の世を何心なく暮し過ごして、醉生夢死する人は、人世の表面のみを觀察し、深く裏面に立ち入らぬからである、丁度無智なる幼童が、己れの病氣のあることをも氣附かず、面白く狂ひ廻はりて、後に至りて大事の起ることを知らざると同樣にて、哀れむべきことゝ云はねばならぬ、若し眞面目に人世を考へて見れば、當てになるものは一もない、財產を當てにしても何時水火盜難の災に罹らんとも計り難い、妻子を當てにすれども何時死別の悲みを觀るかも分からぬ、而るに凡夫の情けなさには、當にならぬ財產を當てにして慾張りの心を起こし、當てにならぬ妻子の愛着に引かされて正義人情を顧みず、一朝不意の事に遭遇する時

は狼狽して爲す所を知らざるに至る、釋尊が「三界は安きことなし猶ほ火宅の如し」と仰せられたのは此事である。

我等の最も當てにすべきものは何物ぞと申せば、唯だ如來のお慈悲一つである、如來の慈悲程強きものはない、たとひ天地が崩るゝことがあつても、如來の慈悲の休むことはない、如來は我等一切衆生を救はんが爲めに、あらゆる大願を起こし、難行苦行して正覺を取り給ひて、常に彼等を監督し、常に我等を守護し玉ふのである、此の大慈大悲を一たび頼む時は、不安の中に大安を得、動の中に大寂靜を得、悲みの中に樂みを得、貧づしき中に富を得、病める中に健康を得、怒りの中に喜びを得、不平の中に慰安を得、其の福德限りなく、此の天地は忽ち大光明界と變ずるのである。

而るに一切衆生は、斯かる貴き救ひの道のあることを知らず、無明煩惱

にほだされて、罪に罪を重ねて、迷に迷を添え、暗より暗に赴くのである、恰も勞働者の宿酔未だ醒めず、夜の明けたるをも知らずして往來に横臥して牛馬に踏まるゝと異なることはない、是に於てか大聖釋尊は無限の慈悲を垂れ玉ひて、我等が爲めに極善最上の法を說き玉ふたのである、此の救ひの聲今尙ほ歷然として響き渡つて居る、釋尊の肉體は三千年の古に屬すれども、釋尊の精神と其救ひの聲とは二十世紀の今日只今も我大日本帝國に響き渡つて居る、去れば三千年以前の釋迦にあらずして二十世紀今日の釋迦である、印度の釋迦にはあらずして大日本帝國の釋迦である、釋尊の精神は無限の時間と無限の空間とを貫いて居る、我等は其教によりて救はるゝ以上は、時の古今と國の東西を論ずるの必要はない、今後幾百萬年の末に至るも、此の精神と救ひの聲とは、三千大千世界に響き渡るに相違ない、予輩煩惱妄想の起る中より、一

度釋迦彌陀二尊の大慈悲を憶ひ廻らす時は、無限の感想一時に胸中に湧き出でゝ、覺えず隨喜渴仰の念に打たるゝことがある。

世人多くは二尊の至誠を知らず、二尊の精神のある所を辨へず、僅かに經論釋の一端を伺ひ言語文句にのみ拘泥して、忽ち佛教知り顔の體をなし、我儘勝手なる批評を下さんとして居るも、彼の泥醉者の往來の人の親切なることを感せずして、其の呼び聲に驚かされて却て爭ひの種となすと同樣にて又た憐むべき者である、嗚呼世は末法と雖ども釋迦の遺教は嚴然として存し、彌陀正覺の大音は十方に響き渡つて居る、我が親愛なる諸兄諸姉、何ぞ速かに救ひの聲を聽かざる。

第四章　信仰ある生活と信仰なき生活

人として理想を有せざるものなし、而るに理想と現實とは多くは撞着

し易きものなり、理想とは未來に於ける冀望なり、現實とは此の冀望の事實となりて顯はれたるものなり、何人も未來の冀望を有せぬものはなし、或は名譽を冀望するものあり、或は位置を冀望するものあるべし、人々の能力と氣質遇境とによりて各其冀望を異にせり、此の冀望を得んが爲めに人間は活動するものなり、冀望なければ活働もなく、活動がなくなれば人間は死ぬるなり、たとひ肉體は生存して居ても精神的生命は既に死せり、活動とは必ずしも肉體の運動に限れるものにあらず、肉體は靜止して居るも精神の大運動して居る人は則ち大活働家と云ふべきなり、然れば未來の冀望は吾人の肉體と精神との活働を催す處の動機となるものなり、冀望には快樂の豫想せらるゝものなり、吾人の財產を冀望するは財產家となれば快樂ならんと想へばなり、名譽といひ學問といひ、位置といひ、皆然らざるはなし、未來の快樂を豫想するを

以て又た種々の困難と戰ひ、而して之に打勝たんとするの勇氣をも勵ますなり、固より苦は樂の種と云ふこともある故に、困難を經過せざれば快樂の來る筈はなし、然れば困難を經過すれば必らず快樂は來るかと云ふに、是は決して必然とは云へぬ、冀望は未來に屬するものなれば、未來のことは屹度事實となりて顯はれ來ると云ふことはあらじ、如何に困難と戰ふと雖も、意外の處より大敵の顯はれ出でゝ、却て困難の爲めに挫折せらるゝことあり、是れ人事の蹉躓し易き所以なり、獨り理想を實現せしむることの難きのみならず、能く理想を實現せしむることを得るも、必ず快樂の之れに伴ふことも亦た難しとなす、其故は、名譽財產を得れば此の保護の爲めに非常の困難となす、或は世間の批評を畏れ、或は水火盜賊の難を憂ふ、若し幾分たりとも損失を招くことあらば、人を怨み人と爭ひ、身心の苦痛は容易ならず、且つ又た人間の

情慾は盲目的に昂進するものにして、其制限なきものなり、一を得れば十を得んことを欲し、十を得れば百を得んことを欲す、己れより高きものを見るときは己れの低きことを恥づ、而して我も亦此の程度に昇らんと欲求す、之が爲めに更らに困難と戰端を開くに至る、而して首尾よく勝利を得ざることあらば、愛に又た大なる苦痛を感ずべし、蓋し是れ人間生活の常態なり、之によりて觀れば、人間の快樂には必ず苦痛の隨伴せること明なり、表面は快樂なるが如きも裏面には必ず苦痛の潛伏するものなり、顯在的快樂の大なるものは、丈け潛在的苦痛の大なるものなり、苦痛の潛伏する快樂ならば眞誠の快樂と云ふことを得ず、吾人は是に於て人世には眞誠の快樂は一もなしと考ふるなり。

既に其快樂は眞誠のものにあらずとせば、冀望も亦た價値なきものとなる、冀望にして價値なければ吾人は之を樹つるには及ばず、冀望を樹

つるに及ばずとせば活働するにも及ばず、活働するに及ばずとせば死ぬるより外に方法なし、然らば世界の人間は何の爲めに生存し何の爲めに經營し、何の爲めに活働するか是れ實に撞着の甚だしきものと云はざるべからず、人間は撞着の生物なりとせば人間として生存して居る價値も亦たあり得べからず、而るに爰に吾人の快樂をして眞誠ならしめ吾人の冀望をして價値あらしめ、吾人の生活をして意味あるものとなさしむる一大原理の宇宙に存在するものなり、此原理は無限絶對の大活働なり、相待界を超越して而かも相待界に普遍なり、自然界にも普遍なり、精神界にも普遍なり、絶對なる故に撞着と云ふことなし、要言すれば、撞着を離れたる此普遍的大活動の中に生活するものとなることを自覺するに及んで、始めて撞着のなき生活を得るなり。

人間の生活は何故に撞着に終るかと云ふに、其理想とする處相待的なれば、名譽も相待的なり、財産も相待的なり、學問も位置も皆相待的なり、相待的のものは到底撞着を免かるゝこと能はざるものなり、其撞着のものを理想とし、之れを冀望し、之を欲求し之を得んが爲めにもがく故に、其生活も亦た撞着に終るなり、斯くの如く觀察するときは、人間は到底生存の價値なきものなり、而るに八十の老翁と雖も猶ほ死を欲せず、何人も長壽を冀はざるものなし、生存の價値なきものにして生存を貪さぼるとは甚しき撞着にあらずや、故に人生は始終撞着に終らざるを得ず、政治家も撞着せり、實業家も撞着せり、學者も財産家も皆撞着せり、豈に笑止ならずや。

而るに無限絶對普遍實在は、相待を離れ、撞着を離れ、古今を一貫したる大理想なり、吾人は此の大理想に徹底して始めて撞着なき生活を得べし、其故は世人の所謂理想なるものは相待的なり、快樂の伴はざる虚僞

的の幸福なり、而るに無限絶對の理想には必然的に快樂の隨伴するものにして、吾人の生涯を一貫して始終離るゝことなし、一度び此妙境に達せば無限の快樂と無限の幸福とは常に胸中に充滿せり、浮世に於ける理想と異りて、裡面に苦痛と困難の潛伏せざる快樂なり。

內外映徹表裏相應して常に肉體と精神とを清涼ならしむ、之を是れ眞誠の快樂と云ふ、苦痛も伴なはず、困難の潛まざる眞誠の快樂を吾人に與ふる理想は到底相待界に於て求むべからず、絶對無限の靈光に接觸するにあらずんば、豈に此妙境に到達することを得んや、然らば吾人の生涯を完全に指導して眞誠の快樂を得せしめ、撞着なき生活を與ふるものは實に此大理想に外ならざるなり、此大理想は即ち吾人の終極の理想なり。

名譽の如き、金錢の如き、學問の如き、位置の如きは虛僞的幸福を與ふる

ものなれば、吾人を撞着に陷らしむる故に、吾人は常に此をのみ追ふて一生空しく果てんには、撞着に生じて撞着に死するものなり、然るに爰に特に讀者諸君に注意せんと欲するは、余は全く此等のものを捨てゝ省る勿れと云ふにはあらず、名譽も必要なり、金錢も必要なり、位置も學問も皆必要ならざるはなし、得べくんば出來るだけ之れを得て可なり、然れども不義の名譽不義の金錢は浮雲泡沫の如し、吾人は無限絶體の靈光に接觸し、此原動力を以て活動し、始めて眞誠の名譽眞誠の金錢も來るべし、其名譽は靈光の中にありて得たる名譽なり、其金錢は靈光の中にありて得たる金錢なり、俯仰天地に恥ぢざる底の結果なり、靈光に照したる結果は內外映徹表裏相應純潔無垢なり、是れ眞誠の快樂なり、果して然らば無限の靈光には如何にして接觸すべきか、哲學も不可なり、論理も不可なり、唯だ一信仰あるのみ、是を以て信仰の生涯には撞着な

し、故に信仰の人には生活の價値あり、信仰なき人の生涯は始終撞着を離るゝことなし、故に信仰なき人は一日も早く信仰によりて撞着のなき生活をなすべきなり。

第五章　人生と宗教

宗教に指を染めぬ學生の人達から往々次の如き議論を聞く事がある、即ち私は少しも宗教の必要を感じない、一體極樂や地獄の有ると云ふ證據がないが、假令あるとした所ろで少しも未來を恐るゝ必要がない、是れまで少しも惡事を働いた覺えがないから、死後は必ず極樂に行くに相違あるまい、古歌にも「心だに誠の道に叶ひなば禱らずとても神や守らん」ともあれば、別に如來を頼まなくても、佛法を聽聞せずとも、差支ないと思ふと、成程斯の如き說は一應は尤のように聞へる、世間の無宗

教の人々には此の誤解の最も多いように思はれるから、一通り愚見を陳べたいと思ふ。

一寸聞た處では、此の議論は餘程立派な樣に見へるが、他の方面より考ふれば頗る實際に遠ひ考である、第一に己れに少しも惡事がないと思ふて居るのは大なる間違ではあるまいか、精密に己れを省みたならば斯かる大言を吐くの勇氣ありや否や。

先つ考ふべきことは、善人とは何ぞやと云ふことである、倫理學などでも善惡の標準と云ふことが大問題であるが、未だ確かな定論のない位い六敷いものである、隨て善人と惡人との標準も仲々立てられぬ、善人と惡人とは時候の移り易りのやうなもので、はつきり境目の立つものではない、春夏秋冬といふた所が、今日からは夏で昨日迄は春であつたと、炭と雪の違ふ程に氣候の變化を感じない、之と同じく、今ま楠正成と

石川五右衛門とを比較せは、善人と惡人との區別は誰れにでも明かなれども、世界中の人間を捕へて、一人々々に善惡の正札を附けることが出來るか如何か、これは頗る疑問である。善人と惡人とは漸次階段をなせるもので殆んど境目がないと申しても宜しい、併し下の如きこと丈けは言へる、惡事が少なくて善事の多い人は比較的善人に近い、之れに反して善事よりも惡事の多い人は比較的惡人に近い、是れ以上の區別は何にも出來ない、されは善人だの惡人だのと申すことは、唯た比較的に云ひ得る迄のことで、絶對的にキッチリと標準が立てられない、此に至りて左の如く斷言することが出來る、善人と云ふにも限りなく、惡人と云ふにも限りなしと。

若し幸にして日本國民が、悉く楠公以上の忠義なる人のみであると云ふ樣な結構な理想國が出來るならば楠公の忠節も何にも目立たぬ樣

になる、若し不幸にして石川五右衛門よりも更に大なる惡人のみとならば、五右衛門は大善人となるのである、善人惡人と云ふことは比較的のもので、吾人は善事を行ひ道を履む上に就ても、少しも程度を定むることが出來ない、己れは既に是丈の善事をなせし故、是れで宜しいと云ふことは到底出來ない。

釋迦孔子の如き大聖人ですら、道を行ふためには一生涯辛勞せられたのである、孔子は「吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に隨ひて則を越えず。」と云はれた、「キリスト」や「ソクラテス」は道の爲めに一身を犧牲にしたではないか、是に就て考ふるも、善人と云ふものに際限のないことが分かる。

次に惡人にも際限のないもので、普通の人が己れは少しも惡事を仕ないと申すのは、多くは法律に觸れないと云ふことを意味して居る、欺僞取賄もせず、姦通もせず、竊盜もせず、殺人もせずと云ふ意味である、成る程是等は形に顯はれた中では、著るし き罪惡なれども、形に顯はれない罪惡の中に更に大なる罪惡のあることを何故自覺せぬのであらふか、法律に觸るゝ罪惡は極めて粗大にして顯著なるもの計である、此れ以外に、些細陰微なる罪惡は數へきれぬ程ある、而して前者は直接に惡影響を社會に與ふる代りに、弊害の及ぶ所は比較的少ないが、後者は間接なる丈け、其の害毒の深きこと子々孫々に迄も浸み渡るのである。

罪惡が行爲に顯はれないのに法律は罰する權利がない、又た行爲に顯はれたことは事實でも、立派な證據が立たなければ罪人となす譯には行かぬ而るに宗教の上より云ふ時は、行爲に顯はれないでも、心に惡事

を思ふたのみでも大罪人と見ることが出來る、或る種類の罪によりては、心中の惡事は却て手足の惡事よりも大なるものもある、是に於て佛敎には身口意の三業とたてる、身業とは手足に顯はるゝ善惡の行爲、口業とは舌の尖に顯はれた善惡の言語、意業とは心の中に營む善惡の事項である、身業と口業の起りは意業に在る、故へ佛敎の實踐道德に於ては意業を最も穿鑿するのである、外部に顯はれなくても、意一つで佛ともなり鬼ともなるのである、吾人凡夫は日夜に意業に於て如何なることを營めるか、意業に於て姦通罪を犯せしことなきや、竊盜を働きしことなきや、猜忌妬嫉、邪推怨恨を挾みしことなきや、自己の良心を欺きて人に諂らひしことなきや、斯の如く眞面目に自己の心中を省る時は、己が心中に無量の大罪惡を犯せることを歷々として自覺することが出來る、如何にして我は善人なりと思ふことが出來るか、我は善人なりと

思ひ居ることが既に増上慢と云ふ大罪悪となるのである。

圓滿無缺の善人は到底人間世界には在り得ない、秋毫程の罪悪のなき絶對善最上善なる實在は唯だ如來のみで、如來は善の最高理想である、善の終極である、如來より以上の善者はない、何となれば如來は無條件なる愛を有し玉ふ、無條件の愛とは少しの雜り氣のない、極善最上の愛を云ふので、人間の慈善も、如來の愛に比較すれば小善である、足柄山の高きも富士に比較すれば高しとなすに足らざるが如く、如何なる善人も如來の前には善人となすに足らない、如來の慈悲の眼より一切衆生を照覽し玉ふ時は、我等凡夫は名利に狂奔し、妻子の愛着に羈され、日夜に煩悶苦惱せる哀れなる獨り子である、罪悪の深き淵より吾等を救ひ出し、如來と等しき善の絶頂迄引き上げんとなし玉ふは如來の愛ばかりである、斯かる大慈悲の前には、如何なる善も善となすに足らず、如何

なる悪も悪となすに足らず、善悪は總して如來に打ち任かすのである、又た如來は是非打ち任かさずに置き玉はぬのである、是を以て吾人は自己を省みることの深ければ深き丈け、又た道徳を勵めば勵む程、益々如來を頼まずには居られぬのである、されば悪人（謂はゆる）には宗教の必要なることは勿論なるが、善人（謂はゆる）には尚更ら宗教の必要の感せらるゝのである。

第六章　人性と佛性

人の天性は善きものであるか、悪るいものであるかと云ふことは古來の大問題となりて居る、或る人は人間の天性は善なるものだと考へて居る、即ち吾々は生れつき善い心を持て居るに相違なけれども、段々と成長するに隨つて穢きものに汚されて悪しく成つたので、丁度鏡に漂

氣の悪り、月に群雲のかゝりて居る樣なものである、夫れ故に穢きものさへ取りのけて仕舞へば、本來の如く清きものと成ると云ふのである」又或人は人間は生まれつき惡るいものだと思ふて居る、人を損い傷つけてなりとも已れの得を取らうと云ふのは人間の持前である、而るに教育に因りて善きことを習ふから、惡るいことをなすべからず、善きことをなすべしと云ふ考ひも起るので、生まれつきに一任し置けば、犬猫同樣に惡事をなすに極まりて居ると云ふのである。

右二つの考ひは全く正反對であるが、何れも獨斷說であるから、其說の是非を容易に判斷することが出來ぬ、前の說にも相當の理由のあるが如くに後の說にも相當の理由がある、然かしながら現今の學術上から考へたならば、人性は本來善と極つて居るものでもなく、惡と極まつて居るものでもない、善惡と云ふ意味の附けられないもの、即ち無記性(中性)のものである、夫れ故に善き條件を澤山備へたものは善人となり、惡しき條件を澤山備へたものは惡人となる、人性の善惡は條件の善惡如何に由りて定りて來るものである、其れ故に小兒の時分から教育を施して、成るべく善き條件を多く與へて、善き人間と成る樣にせねばならぬと云ふのである、是れ教育の大切なる所以である。

佛教の上に於ても二つの說がある、即ち聖道門に於ては本地の佛性說を立てる、人間には本來佛性あり、然れども惡業煩腦に染められて只今では其光明を發輝せしむることは出來ぬ樣に成りて居るのである、若し修行の功を積み重ぬるときは、終には本地の佛性の全分を發輝して佛と成ることが出來るなりと教ゆるのである、是に反して淨土門に於ては先づ無佛性說を主となせり、我等には到底佛となるべき原種を宿とし居らぬ、惡業煩腦の凝り固りである、唯だ全く如來の御力のみによ

りて救はるゝのである、故に己れを捨てゝひとへに如來に歸命せよと教ゆるのである。

聖道門の佛性說は理論の方から考へたので、淨土門の無佛性說は實際の方から考へたのである、聖道門の眞如とか法性とか云ふ高尙なる理論的の立場から考ふるときは、是非とも佛性說を立てねばならぬ、而るに淨土門の實踐的の立場から眺むる時は、如何にしても人間に佛性と云ふが如き貴きものがあるとは思はれぬ、吾人の心に考へて居ること、手足に行ひて居ること、口で喋べること、總て虛假不實が多いのである、斯樣に實際の方から考へて見れば、吾人に佛性のあることは到底分らないのである、乃で如來の御他力に賴りすがるのである、依て親鸞聖人は「大信心は佛性なり」と仰せられました。

佛教に於ては薰習と云ふことを申すが、是れは善き香に觸るれば善き

薰を受け、惡き臭に觸るれば惡き臭に染むが如く、常に身口意の三業に於て佛の行を營まば佛種子は自から備はり、佛意に反した惡事をのみ營む時は自ら惡種子を積み重さぬると云ふことである、而るに吾人は無限の昔より惡の薰習をのみ積み重ね來りし故に、最早や惡種子のみ增長して、佛種子として觀るべきものは一つも無き樣に成りて居ると云ふのが淨土門の立方である、去れば吾人が佛となるべき種子は如來の方に既に成就しあるを以て、如來は大慈悲を垂れ玉ひて、此の種子を我等凡夫に授け玉ふなり、是を以て一度如來にすがり、如來の種子を頂きたるものは如來の救濟に預かりたる人である、親鸞聖人は和讃の中に左の如く示されてある。

信心ヨロコブソノ人ヲ　如來トヒトシトゝキタマフ
大信心ハ佛性ナリ　佛性スナハチ如來ナリ

又左の如く仰せられた

如來スナハチ涅槃ナリ　涅槃ヲ佛性トナツケタリ

凡地ニシテハサトラレズ　安養ニイタリテ證スベシ

此の世の中に於て大信心を得た人は、既に佛性の備はりたる人と成りたるに相違なし、而るに、既に如來と同等の種子を如來より賜はりたるものなるに尙ほ如來と同等の働きを表はすことの出來ぬのは如何なる理由なるか、信後の人と雖も怒の心、怨の心、愚痴の心、慾の心は決して無いと云ふ譯には參らぬ、是は抑も如何なることかと申すに、過去無限の長時間に於て、我等自から蓄積し置きし習氣の未だ消へ盡さぬ故である、大信心を喜んだる一刹那に於て、無量永劫の惡の種子は根本的に滅ぼされたりと雖ども、尙ほ其習氣のみが殘り居る故へに、信心獲得の後と雖ども、煩惱は依然として止まぬのである、而るに信前と信後と相異する所は、信前の煩惱は惡の根源たる種子より起るものなれば、根のある花の如く、信後の煩惱は根のなき花の如くである、前者は益々惡の種子を增長せしむるのみなれども、後者は早晩消滅すべきものである、

煩惱の起る下よりも、信德によりて改悔の心を起こし、如來の御前にて謝罪するに至るべし、是を以て此の世に於て肉體の存在し居る間は、惡の習氣に催されて時々惡業煩惱を造ると雖も、死して肉體と離るゝ一刹那には、習氣は忽ち失せ去りて本來の面目たる佛性は一時に光りを發するのである、故に吾人の理想となせる極樂世界は現世界其ものを指すにあらず、又煩惱具足の此身此儘佛なるにもあらず（事實に於て、吾人の理想世界は遠く死後に至りて始めて實驗することの出來るのである、宗祖大師が「凡地にしてはさとられず、安養に至りて證すべし」と說かれたるは、實に高尙悠遠なる、空論を避けて、現在の事實に就て下され

たる千古の斷案である。

第七、章　逆境に處するの勇氣

人の世に處するに、順境なることもあり逆境なることもある順境に處して心の增長せぬ樣に制して行くことも必要なるが、逆境に處して意志の挫けぬ樣になすことも大切である、例へば立派に金儲の出來た時に、餘り調子に乘りて贅澤を極め、一厘の貯蓄もなくして置くならば、一朝不幸にして大損失の來りた時に周章狼狽せねばならぬ。又少壯健康の間に暴飲暴食して情慾に耽けるときは、晩年に至りて大に苦しまねばならぬ、災の至りて後是に處する方法を講ずるのは既に遲れて居る、災の來ぬ中に充分の用意を調へ置くことが大切である、是は順境に處する道である、この順境に處して心を制することは、左程六かしくはな

い樣であるが、普通の人は多くは順境の間に災の遠因を宿して居るのであるから、此處に少しく心を用ゐて、相當の準備をせねばならぬ。

而るに災の來るには漸次に來るのと不意に來るのとありて、如何に注意を細かく配ばつても、人間の心の働きには大抵限りがあるから、少しの隙間もなしと云ふことは到底出來ぬ、此の隙間に乘じて種々なる災の襲ひ來るものである、漸次に來る災に對しては豫め覺悟を極め居る故、比較的に苦痛も少からんが、意外の處より來る災は恰も落雷の樣なもので、人間の精神に激烈なる打擊を加ふるものである、既に逆境に陷らぬ中に用意をなし置くことの大切なることは勿論であるが、それは比較的容易なること故、別に八釜く講ずる必要はない、乃で今私の謂はんと欲するのは、既に逆境に陷りた人は、如何にして心を取り直すべきかと云ふことである、寒い時に風を引かぬ樣に用心することは勿論大

切なるが、既に寒骨に耀りた時には如何に治療すべきかと云ふことである。

斯く申すと夫れは消極的のことで面白くないと考ふる人もあらん、然れども、私は消極的のことは、積極的の事よりも、却て大切なることが多いと信ずるのである、一體法律の如きものは全く消極的に出來て居るもので、法律の精神は善人を作る爲めにはあらずして、惡人を作らないと云ふことに歸して居る又た醫師の社會に貢獻する處も積極的よりも却て消極的の方が多いのである、積極的に進歩したいと欲するのは人間の自然の要求であるから、此の方に力を注て教を施くよりも、却て消極的の方に力を注くことは大切である、消極的の方が程よく行きさへすれば、積極的の方は自然の要求に應じて出來て行くのである、要言すれば、順境に安んじて居る人を勵ますことよりも、逆境に陷りて苦しで居る人を慰むることは餘程大切である、逆境に處して心の慰安を得るならば、更らに勇氣を呼び起し逆境を轉じて順境となす丈けの餘裕を生ずることが出來る、總て物には表裏兩面があるから、一方に積極なるものは一方に消極である、一面に消極なるものは又た一面に積極である。

乃て順境だの逆境だのと申すことを能々考へ觀るに、全く主觀的の事實である、客觀的には順境もなければ逆境もない、心の持ち樣一つで如何樣にもなるものである、外より來る事件に對して、己が心中に是はよいと思へば順境になる、是は惡るいと思へば逆境となる、長命して仕合だ、小供が多くて仕合だと思ふて居る人があるかと思ふと、餘り長命して小供が多くて苦心なことだと思ふて居る人もある、財産もあり、地位もあり、名譽もありて幸福だと思ふて居る人があるかと思ふと、財産地

位名譽の如き物を糞土に比して居る人もある、釋尊や孔子の如き人は總て其樣なものを却て夏蠅思ふて居られたに相違あるまい、俗眼にて眺むるときは、生涯貧乏で世に容れられないのは誠に不幸な人の樣に見ゆるけれども、此等の聖人が物外に儼然として道を行ひ德を修めて一世の師表を以て自ら任ぜられた大精神には、仲々百萬兩の財產家も思ひ及ばざる程の大愉快が宿て居るのである、又た「ソクラテス」や「キリスト」は生涯貧乏で世に容れられざるのみならず、血氣壯年の身を以て敵の爲めに殺害せられたではないか、然かし其精神は今日までも生きて働いて居る、此等の人の胸中には、自己の生命よりも正義が貴いのである、故に生命を犧牲として正義を貫いたのである、此處に大愉快があるのである、正義を荷ふて世に立つ人には、肉に死して靈に生くと云ふ大度量が最も大切である、現今の如き腐敗極まる世の中を一掃するの

は宗教家の大責務であるが、此の天職の爲めには名譽も地位も、生命も犧牲となす程の大勇猛心がなくてはならぬ、自己の利害を省みないで、不正義の人と飽まで闘ふでゆかねばならぬ、是も逆境に處するの勇氣である、心の置處によりて順境ともなり、逆境ともなることであれば、其心の置處を定むることが大切である、善いの惡るいのと云た處で取り止りのなき人世であるのだから、心の置處が定まりて居らば、外界の刺戟によりて心の轉倒する憂がない、外界の刺戟によりて常に轉倒せらるゝのは心の主人公が留守であるからである、主人公の了簡が間違て居らば一家が治り難い樣な譯けで、心の主人公がいつでも大盤石の上に座して居らねば我心を取り締ることが出來ぬ、如何樣なるものが吾人の前途に舞ひ來ると、平然として此に對するの勇氣は此によりて養はるゝのである、斯の如き覺悟をなすには一大確信がなくてはなら

ぬ。

吾人は如來を確信することによりて此の覺悟を得るのである。得意なるときにも、失意なるときにも、吾人の小さき心を如來の大慈悲心の上に据え置けばそれで宜しい、殘念と思ふとき、惡くひと思ふとき、慾しいと思ふ時、直に如來の慈悲を念ずべし、人に欺かれて口惜しいと思ひ、考へ損いをして失敗した時、いくら悶いて見たとて致し方がない、後悔の餘り悶き苦むのは凡夫の通弊ではあるけれども、是は凡夫の了簡の狹い證據である、偉大なる宇宙の精神に比較すれば、一身の幸不幸位は何程の事でもない、佛の慈悲を念ずる心に成りて見れば、貧乏したときにも病氣に仆れた時にも、佛の力が吾人の身邊に取り捲いて下さるのである、恰も病氣ある子供が慈母の膝の上に抱かれて居る樣な氣になりて、安々と心を落ち附けて居れば宜しいので、自分から彼れ是と悶がくには及ばぬ、此の境界に住すれば、逆境に處しても綽々として餘裕が出來る、更に時節の到來を待ちて大に志を伸ぶることも出來る、如何なる事業を企つるにもせよ、此處までの覺悟を先づ極めて置かねばならぬ、此の覺悟さへ動かねば、事として成らぬと云ふことはない、是は如來を信じた人の勇氣である。

第八章　主義より來たる力

人が此世の中に存在せる以上は、必ず何等かの力を要するものである、否何等かの力を得んが爲めに勉勵奮鬪して居る、其れだから、力の強きものは漸々進歩して偉くなり、力の弱いものは自然に淘汰されるのである。斯樣に力の弱いものが、力の強いものに抑壓せられ、遂には生存の區域外に排斥せらるゝ不幸に至るといふものは、故意に求めた結果で

はなくて、人口は增加する、生活は困難となるといふ自然の勢にて、生存競爭の結果遂に自然淘汰されて、弱者の敗北となるのである。

此生存競爭といふ事は、生物界に行はるゝ事である、此の詞を人間界に應用するは少しく不穩當かも知らぬが、實際に優勝劣敗の法則が、此世に行はれ、生存競爭の結果として、弱いものは自然淘汰せらるゝ以上は、其に對する用心をなすは、必要な事である。即ち吾人は世の中の進歩に後れぬ樣に用心しなければならぬ。其れに就ては、大に勢力を養ふ事が必要である、此れ即ち吾人が何等かの力を要求する所以である。

吾人は種々の力を要求するが、先づ第一に體力の必要がある。筋骨逞ましく鬼をも挫くといふ體力がなければならぬ。殊に今日の學生諸君には病弱な人達が多くて實に慨歎である、大に體力を養ふて、恢復を計はなければならぬ。如何に學問しても、大事な健康が許さなければ、遠大の

志も遂に水泡に歸して仕舞ふ、實に惜しい事ではありませぬか。學資は萬を積も、健康が許さなければ、中途廢學しなければならぬ。私の學友にも病の爲め學業を中止した多くの實例があります。殊に卒業して將に働かんといふ時になつて、體力が續かず、遂に倒るゝ如きに至つては、惜みても餘りある事である。故に人間は、先づ體力が第一に必要である。

第二に金力が如何しても大切である、今吾々が如何な地位を得ても、多くは金力が必要である、我國が露國と二ヶ年餘も大戰爭をして勝利を得たのは大幸であるが、戰後の經營には、先づ第一に不足を感ずるものは金力ではありませぬか。朝鮮を初め、滿洲より金州半島樺太迄我勢力範圍となつたとても、お隣りの支那を初め、英、獨、佛、米と各國が、大資本を傾注して商戰を挑た時には、先づ我が對戰には、金力の資本が必要ではありませぬか。是は私の專門の方面ではないが、斯る場合には、必ず金力

が第一に必要であらうと思ふ。

第三に學力である、人間の力としては、是非これも必要である、體力の強いのは攝養衛生によりて得られ、金力も商策、其宜しきを得ば、得らるゝ事であるが、學問の優勝は、體力や金力のみでは得られぬ。是非とも勉強して學力を養はなければならぬ。日本が近來、非常に學問が進歩し、教育が普及したといふが、最近に某博士が、海外を漫遊して歸られた話しに、日本はまだ〳〵凡ての點が西洋に及ばぬ。殊に學問の點に於て、大學を初め、凡ての教育機關が、建築、器具を初め、教師まで、西洋と日本とは、田舍と東京との比較よりも、其差が一層甚しいといふ有樣であるとて、大に慨歎せられた事である。我日本が、西洋と肩を比べるといふ事は、實に前途遼遠な事である。

以上の如く、體力にせよ、金力にせよ、學力にせよ、何れも皆人間として世

の中に立つて行くには、最も必要なものである事は、此上長々といふ迄の事もあるまい、されば凡ての人が、此三を得んと奮闘して居る。或者は體力を得んが爲め、或ものは金力を得んが爲め、或者は學力を得んが爲めに皆働て居る、人間として世に立つには、此の三つの中、二つ或は三を是非得なければならぬのである。

私が曾て回向院の角力を見物致しました、其日は丁度九日目ではあるし。梅と常陸の顔合せといふ幸福な日であつた。最初友人に誘はれた時は、私は角力に趣味のない事であるから、最負角力はなし、何れが勝つた處が、我れ關せず焉だから、止そうといふた處が、友人のいふには、梅と常陸の顔合せといふ事は珍しい事である、假令此後にもあらうが、其時君が健全でなくば行けず、又た僕が今後誘い出すといふ事も受合はれぬで、此好氣逸す可らずであるといふ事であつたから、其れでは出掛けよ

といふ事で、朝の七時頃より行つたが、初めはつまらぬ褌持ち等の取り合ひであつた、愈々梅と常陸の顔合せとなると、見物人も力み出す、滿場色めき亘つた處へ、梅が便々たる腹を突き出して土俵に現はれる、此方からも常陸が堂々たる態度で出て來た。如何に角力に無趣味な私も小顎を傾けた、暫らく取り組だが終に梅の敗北と成りた、誠に氣の毒なる感じがした。

大砲と駒との取組も見たが、大砲はジット支へて身振いもせぬ、駒は大砲を二三回持ち上げたで、大砲は當に危機一發といふ時、駒が一突きで勝てるのであつたが、駒が推し出さずに「分け」となつた。見物人の話しには、駒が貧困の時に、大砲の内に居候となつて居つた事があつたので、角力道德よりして強て大砲に勝たなかつたとの事である。されど駒の力を示さんが爲めに、二三回持ち擧げたといふ事であつた。私は此れを聞

て、多少の感慨なきにしも非すであつた。大砲も、常陸も、年一年衰へて來て、七八年の後にはずつと衰へるだろうとの事である。されば、人間の腕力といふものも、一時のものであつて、漸々年が行くと共に衰へて來る、眞に覺束ないものである。

國家と國家との間にても、海陸軍の軍備を擴張して、敵國を打ち敗かすといふ事は、壯は即ち壯であり、快は即ち快なれど、戰後の國家には、何物を殘すだろうか、慈慘なる傷害の外、人類社會に功績を殘した事は歷史上に一つもない。見よ羅馬は一時非常の勢力があつたが、今日の彼の狀態ではありませぬか、ナポレオン、アレキサンターの馬蹄は、確かに歐亞に印せしも、これ一時の事にして、今に於て何物の遺業も出來て居らぬ、如斯腕力の壯擧はこれ一時的のものであつて、永久でない。

次に金力があれば、如何にも贅澤な生活も出來るけれども、これも永遠

の勢力あるものではない、曾て新聞にも見えたが、或る富豪が數十萬の財産が有たが、三年も五年も、惡作が續いた上に、洪水に遇ふ。家庭には病人が頻りに出て來る、遂に十年も立たぬに、零落し切つて、主人も失望の餘り自殺した。此れを見ても分明である、人間が金さへあれば此上もないと思つて居るが、金が永遠の力を與へぬものである。

第三に學力が如何に大切じやといつても、矢張り限りがある。如何に立派な說を立てゝも時勢の進步によつて陳腐採るに足らぬものとなる。有限な學力で立てた學說である一から、後に出た學者が、これを破る事が出來る、學力とても永遠の力があるものでない。

然らば永遠の力を與ふるものは何ぞ、主義の力、信仰の力である。切るも切れず、燒くに燒けぬ、破るに破れぬ力は即ちこれである。これが最後の力である。此れ計りは、打たうが叩たこうが、破れも碎けもせぬものであつて此れ程强いものはない。

昔し羅馬には、非常な殺虐な事をやつた事がある。宗敎上の憎惡から改宗者が出ると、其れを惡むで、殘虐して、其後に改宗者の出る事を防ぐのである。其改宗者を所刑するには、裸體として柵を作つた園みの中に入れ、虎とか、狼とかを追ひ込で、其猛獸と格鬪させる。すると忽ちにして、腕を嚙まれ鼻をそがれ、鮮血淋漓の慘狀を呈するのである。其れを羅馬人は手を叩いて喜で觀だといふのである。

又兩方が力を打ち振つて、眞劍勝負の切り合ひを爲すのを、回向院の角力場の樣に棧敷を作つて、其れを帝王を初め、貴族、富豪が集つて喜で見て居る。其の慘憺たる事、前の虎狼との格鬪に劣らぬのである。そして、勝つた者は帝王及び見物の貴女及び紳士より、賞讃を得ると同時に、敗北者は生氣地なしとして罵られるのである、而も其敗北者が死ぬ時、卑怯

にも悲鳴でも擧げようものなら、四方八方より辱しめられる、併し同じ負けても、泰然として死に就く勇あるを見ては、滿場の賞讃を得、帝王自ら其傷口の血を嘗めてやつたといふ、蠻風も甚だしい事をやつたものである。日本の角力を、西洋人が野蠻なといふが、此れと比較になる事ではない。或時斯樣な決鬪が火花を散して、盛に戰つてるといふ眞最中に、或る老人がつか〳〵と現れ出で、兩決鬪者の中間に立つて、「貴樣達待て」とやつた。見物人は此れを見て、默つては居らぬ。頑爺を切り殺せ、打擲れといふ聲が、滿場に起つた。諸君が回向院へ行つても、常陸と梅の取組の時、餘り度々水をいれると、「餘計な事をなすな」と罵り出すでしよう。此場合であるから、兩者が老人を切り殺し、其死骸の上で戰つたといふ事である。斯樣にして、老人は身を犧牲としたが、此蠻風は此れ限り止んだといふ事である。此れが老人の身は劇場の露と、あはれ墓なく消えたが

其人道の爲めに盡くすといふ主義の力は、能く此蠻風を一朝にして止め得たのである。斯樣に此老人は身を犧牲として、其主義を貫いだ。此れが信念ある行爲でなくて何であろう。唯人道の爲めといふ主義の力一つでよく此蠻風を止めた、此れは腕力でも金力でも、學力でも出來ぬものである。唯、信念の力である、能く身を殺され、肉を刻まれ、鮮血流るゝとも、其外如何なる虐待を蒙むるとも、其信念は光輝を益々放つのである。基督は十字架に刑せられたで、益々其信念は後世まで光を增して輝いた、其例は幾らでもある、孔夫子も到る處迫害を受けられた、遂に講義をする場處なく、大樹の下に、弟子と共に道を語つて樂で居られた、其時に桓魋といふ男が、其大樹を切り倒さんとした、其時孔夫子は「天德を我に生せり桓魋それ我を如何せん」といふて泰然として居られた。諸君これが信念の力でなくて何であろう、此れ丈けの覺悟あればこそ、孔夫子の感

化力が、東亞の天に漲つて、偉大なる功績を殘しつゝあるのである。孔夫子の此覺悟は、腕力や、金力や、學力の爲めでない、唯主義の力即ち信念の力である。

私は淨土門のものであるが、越前吉崎で本願寺八代目の蓮如上人が、說敎して居られた時、其近處の或る御嫁さんが、蓮如上人の御德を大に慕つて、其の說敎を聞かんとて毎夜吉崎へと參つたのである。處が姑が此れを見て、嫁の奴不屆千萬、坊主の說敎を聞くなどゝは怪しからん奴じや、一つ脅して止めさせようと思つて、嫁が吉崎御坊へ參る途中に、大きな林があつて、其處に閻魔堂がある、姑婆は其堂にあつた鬼面を被つて、白い布などを身に纏ふて、嫁の歸りを待つて居る、嫁はそれとは知らずに御念佛諸共に歸りかけた、其時に姑婆さん、わあつと飛び出した、處で御嫁さん一寸も慄かぬ、噛みたくば噛め、食いたくば食へ、此信仰をばよ。

もや食い得まいと構へて居る姑婆さん仕方がない、實際噛みつきも食ひつきも得せぬのである。如何に頑固な姑婆さんも、若い嫁に斯くまで堅い信仰があるとは知らなかつた、己れも其處まで氣が附かなかつたと悔い果てゝ、竟に立派な信者となつたといふ事である。此れが信念の力主義の力である、鬼の前で、己れは何十萬圓の御金があると堪定して居る譯にも行かぬ、又た鬼の前で哲學や、物理の講釋は何の功もない、唯信念の力一つによる外はない。

宗敎の信念といふものは、虛待壓迫されれば、さるゝ程、雨降つて地堅まる」で、鞏固となるのである、宗敎家は虐待所ではない、死地に幾度も入るのである。法然上人や、日蓮上人の如き、殺された方が尙其信念があらはれたかも知れぬ、基督は十字架に登つたで釋迦より偉いと、基督敎徒中にいふものがあるが、殺されたと、殺されなかつたとて、人物の標準が定

まるものではない、殺されたとて殺されぬとて、何ともないのが信念の力である。其殺されたのは、其當時の虐待に由て、殺される機會があつた爲めである。斯樣に宗教家が、虐待の度が加はる毎に、信念の花がより益々美はしく咲くといふものは、此れが主義より得た力ではありませぬか。人間が此世に於て、腕力や、金力や、學力を頼だとても、此等有限の力はまさかの時、何の役にも立つものではありませぬ。實に人間の本質となるものは、信念これ一つであります、此れさへあれば、鬼が出ようが、猛虎毒龍何でも御座れ、何ともないといふ度胸が据るのである。

日本の國力が發展して、世界の日本として、活動するには、益々刻苦勉勵しなければならぬが、これには是非此信念がなくては駄目である。表面を飾り、人を威しても、駄目である。金箔は直にはげて實力とならぬもの

である。眞に切つても切れぬ、燒ても燒けぬものは此信念である。實力を養ふて、生存競爭場裡に立つて、勝つの負けるといふ、勝敗を眼中に置かぬといふに至るが、大乘佛教的信念である。勝敗を眼中に置くのは、まだ小乘的である。

斯く、其勝劣成効不成効を眼中に置かずして、唯だ主義、信念の力により勇往邁往すればよいのである。吾人は斯く主義の力を以て、働く人を名けて、偉人物といふのである。吾人は專心修養して以て此主義の力信念の力を養成する事に、努めんと欲するものである。

第九章　自信力

人間は何事をなすにも、自信力が無くては駄目であります、勿論斯く申す私に特に非常なる自信力があると云ふ譯ではありませぬが、此自信

力が無い時には萬事を相違なく成すことが出來ませぬ、そこで政治上でも商工業上でも何でも彼でも、此自信力があると成功を期してやることが出來ます、然し乍ら所謂成功と云ふ事を眞面目に考へて見ると云ふと、人間には眞の成功と云ふ事はない樣に思はれます、人間のやる事は是丈けで濟んだと云ふことはないもので、人力には限りがあるけれども、其義務や責任には限りがありませぬ、慾望も益々大きくなり、理想も日一日と進で來るもので、之れまでやつたら安心ぢや成功ぢやと期して居た處まで達すると、其處で又第二の慾望が起つて、これしきの事で成功と云はれるものか、滿足と思はれるものかと云ふ事になりまず、勿論百萬二百萬の金持は、其實業界に於ては一厘もない人より偉ひには相違ないが、其人から見る時にはまだ〳〵是丈では如何もならん、も少し金を儲けねばならんと苦鬪致します、學問でもそれと等しく、三

年やつたから哲學が判つた、五年やつたから科學が悉く呑み込めたと云ふ樣なことなく、之丈けやつたから、成功して仕舞つたと云ふ事はありませぬ、唯限りなき成功なるものゝ中で、自分が豫期し、理想として居た處まで達した其都度に於て、豫期丈け成功し、或時に理想として居た事のみが成功したと云ふのに過ぎません、ツマリ一時の成功、瞬間の成功で、本當の成功、永久の成功ではありませぬ、吾人が死ぬる迄やつても眞の成功に達するとは六ケ敷あります、されど先輩の人々は偉らそうに見え、成功者の樣に見えるものであるが悉くそーゆー譯のものではありませぬ、然らば如何なる人が成功者であり、成功者に近いものであるかと云ふと、自己が一旦着手したことを永く續け得る人であろふと思ひます、經營して居る事に就て如何なる困難が湧いて來やうとも、苦境に陷ろうとも、泰然として其困難と苦境を排して進み得る處の人は

成功する力を持て居る者と認むることが出來ませう、彼の安田とか三井の如き實業界の人々は、日夜其事業の經營に忙がしく、安田氏の如きは一日に三時間しか眠らないと云ふ談で、小店の人々よりも餘程苦しい樣であります、が然し其事業のために屈せず、撓ます、堪え忍んだ力を得た人で、成功の鍵鑰を持て居る人と云はねばなりません、些細な事からして其養つた力を挫折して、再び起つ能はざる樣な人は失敗した人であると見ねばなりますまい、其「成功」を感得して、徹頭徹尾其事業なり學問なりに盡すことの出來る人は、成功した人、否成功に近い人、成功に進みつゝある人と申さねばなりません、たとひ五十圓の資金を持ていも其人の生涯を通じて、自分の仕事に一生懸命やる人は成功の人であると思ひます、勿論前にも申した如く、成功したと云ふ人は世の中には御座いませんが、如斯人は成功する力を以て居るものであると言ふ事

本は云はれませう、然らば其「力」とは何であるかと申すと、即ち「自信力」其者であります、萬事をなすには自を信ずると云ふ事が大層必要なことで、斯であると定めた以上は、たとひ衆の嘲笑を受けても、己れのやる事が誠であると信じて、進むことが必要であります、彼の天下を掌の樣に取扱た秀吉でも、其母の懷に日輪が入つたと夢みて懷胎した、それを聞た秀吉は「己は日輪の生れ變りである、天照大神の力がある、吾は天下を支配する力があるのである」と信じて居たと云ふ談で御座ります、又彼の「ワシントン」も、戰場で澤山の彈丸を蒙つたけれども、自ら信じて思ふ樣には、「己れは自由のために大義の戰をして居るのであるから、決して彈丸は當らない」と自信して、戰爭したので、雨なす彈丸も彼身を傷けなかつたそーです、それから又鐵血宰相のビスマークも、凶漢から狙はれて、連發銃を六發打たれたけれども、當らなかつた、そこでビスマークは

「天は己を守護して居て呉れるのである」と深く自ら信ずる處があつたそーです、彼の孔子の如きも桓魋が迫害せんとした時に「天德を吾に生せり」と、悠々として仁義の道を說き出したと云ふ事です、實に彼は德が吾を守つて居て呉れるのであるといふ、切つたり燒いたりすることの出來ない、一大自信力を以て居たのであります、そこでお互が社會に立つ時には、何處〳〵までも自の信じて居る主義を貫くと云ふ決心がなくてはなりません、科學者のガリレオが天動說に反對して地動說を立て、飽まで自信を貫かんとして羅馬法王の怒に觸れて入牢されたり、ブルーノーがドグマーに反對して燒殺された如き境遇に立つても、自ら信じた處は之を行ふと云ふ事が大切であります、特に宗教の傳道に任ずる者は此覺悟が一番であります、如斯人々はたとひ肉に死しても靈に生きる人で御座りまして、ガリレオは殺されましたけれども、地動

說は依然として殘つて居ります、此點に於て確に彼は成功して居ります、ツマリ自信力の强い人は事を成すにも亦大きいものであります。

佛敎の上では發心、修行、得果と云ふ事を申しまして、佛道修行の規則となつて居ります、然し此三つの事柄は佛道修行者のみに限つたものでなく、今日の學生でも商工業者でも、何でも彼でも此外に違つたやり方はありますまい、茲に學問を成さんとする者があるならば、先づ志を立てる、即ち發心して田舍から東京に出で來るのが一番大切であります、然し乍ら折角發心して上京したからと云ふても、志を立てたばかりでは何の役にも立たないから、修行即ち勉强に取かゝらねばなりませぬ、而して佛敎では此の修行即勉强を三つに分けまして、戒、定、慧、と致します、言を換へて云へば、戒とは戒律即規律」で、定とは專心とか座禪とか云ふ事で、慧とは智慧であります、勉强し修行するに當つて、浮世の事に動

揺されては駄目であるから、チャンと規律を守つて嚴格に事を處し、次で座禪して即ち精力を一方に集注して專心其事を工夫する、斯くすると自ら智慧が現はれて來ることになります、今の學生でも此三つがないと卒業は覺束なう御座ります、ヤレ女義太夫ぢや歌加留多ぢや「ビール」ぢやと騒ぎ廻る樣では到底成業は出來ません、眞に學問し修行しやうと思ふならば、女義太夫や飲食を謹まねばなりませぬ、ビールの空瓶を枕に小說と云ふ格では到底駄目であります、戒と云ふ處の校則を守り忠實を旨とし、定といふて心を散さぬ樣に酒ぢや義太夫ぢやと云ふことを止めにしてこそ、初めて圓滿なる智慧が發達して來るのであります、これは修行の談であります、得果といふ所謂成功とか成業とか云ふことも發心が堅固でなく修行が怠り勝であつたならば、目出度い結果を得ることは出來ませぬ、播かぬ種は生えぬものですから、先づ鐵

石も曾ならぬ堅き發心立志をして、規律正しく專心に勉めることが大事であります、此佛法修行の有樣と、お互が日常の生活とは同樣であつて、大切な佛道修行さへ此戒、定、慧に依てやるのであるから、之を社會日常の事に應用して行ふならば事として出來ない事はありますまい、而して此間をズーツと貫くものは一の自信力でありまして、實に此自信力が何より大切であります、學校入學の競爭試驗の如きも、如何も覺束ない樣であると云ふ樣な考を以て居る人は、初めから駄目に定まつて居りますが、一生懸命遣れば大丈夫だと云ふ自信力がある時は屹度及第疑なしであります。

乃で倫理の實行上に就ても同樣であつて、今暫く高尙な議論はさておいて、情の心を考へて見ると、善惡の二心があつて、互に戰爭して居る樣で、此二心が身心を支配する樣に思はれます、人から失敬な事を仕向け

られると不平な心が起るかと思ふと、いつの間にか善い心が今の不平な心を起したのは間違て居た、人の缺點を云ふのは自身の心に矢張り缺點があるのであると云ふ樣になつて來ます、それから又洋食を食ふて遊んで居たいも思ふと、善心がまて〳〵滿韓の野に居た出征軍人達は三度の食事も食はないで居たではないか、甚だ濟まない考を起した心を制する、斯樣な其合に實際上、善惡の二心がある樣に思はれる、そこで其二心を競爭さして見て、惡が勝てば惡に陷り、善が勝てばそれを繼續するごとになる、されば此時に於ては、其自信力が非常に必要になつて來ます、ポールも吾には二心があつて常に矛盾撞着して居る、嗚呼誰が此矛盾から救ふて與れるだろふと叫んだ、吾人はそれ故に不正義を壓倒する力を得なければなりませぬ、偉人物なるものは善心が惡心を壓倒した人であります、特に宗教的偉人物には非常なる崇拜を棒げ

すには居られませぬ、何故ならば、政治家や軍人等は、立派な金持になり、天下の將軍となると云ふ、名譽と財產を目の前に見て居るに反して、宗教的偉人は其樣なものには少しも目を與れません、誰自からの信ずる主義を以て一切の人々を救ふより外に何もありません、金錢名譽の些事よりも一切衆生と云ふ大事があります、釋尊は主義の爲に天子の位をも捨て、衆生を救はんと活動なされ、基督も其主義のために身を犧牲にしました、昔の偉人物は斯樣な具合に自信力と云ふものが非常に强かつた、其の結果は三千年の古に肉に死なれた釋尊も靈に生きて現今のお互に慰安と希望を與へ給ふのみならず、永遠無久に其自信力が發展致します、されば如何なる人でも、釋尊の如く悠々として迫らざる宗教的偉人の意志と自信力を手本とすることが、軍人や政治家を手本とするよりも偉大な力が有るものであろうと信じます。

然るに我日本の佛教は舊慣で存して居るもので、形式的佛教となり、最早や感化を與へる原動力が盡きたかの樣に見受けられ、歐洲文明國を後援として居る基督教に對して、其教田を爭ひ傳道に勉めると云ふ丈の自信力があるか如何にと云ふに、悲しい哉其自信力が不足の樣であります、が然し其教理を信じた以上は其人格をも信じて、同情と尊敬を拂ふならば、大磐石の如き意志と自信力を受繼ぐことが屹度出來ます、偉大なる活動をやることが屹度出來ます、今日の佛教徒に自信力のないのは佛教を信ずることの足りない證據であつて、別に佛教其物の實質に依るのでありません、然し或人は斯ういふことを考へて居る樣です、今後の世界的宗教は耶蘇教であろ、ふ、佛教徒がいくら騷いた處で、大阪の夏冬の陣の樣なもので、運命は自ら定まつて居る、然し乍ら遊んで居るのも本意ないから、小少しばかりやつて見やうと云ふ人があるが、

之は實に間違の骨頂でありませう、何故かと云ふをと一言で申しますれば、釋尊と基督の性格は非常な差違がありまして、基督教のバイブルには隨分金言もありますけれども、佛教の經典に比して見ると及ばざる處が數多あります、基督の生涯を見ると云ふと時代が然らしめた爲めでもあらふが、コセ〳〵いい〳〵とコセついて些の餘裕もありません、丸で針の尖で人の腸をツヽク樣な有樣です、然るに釋尊は泰然自若、倦まず逼らず、其度量に於て其感情に於て、實に世界的萬民的で、血もあれば涙もある、綽々として餘裕のある方で御座ります、そこで物質文明は愈々盛んに、生存競爭は益々激甚に、人間を敵視し合ふ物凄い世の中で、英、米、獨、佛の如き諸國には、既に針でつゝく樣な耶蘇教では滿足する事が出來ないといふ傾向が漸々に現はれる樣ですが、之は誠に然るべきことで、基督教に依て彼等が救はれんとするのは間違でありませう、然るに世

界に於て耶蘇教に代るべき宗教は佛教以外にありませんから、眞面目に働いて此高尚圓滿なる佛教を嚙み摧いて歐米人に呑ませたならば、渴者の水を欲する樣で御座りませう、宗教は國力に伴ふて膨脹するもので、基督教は西洋各國の國力に伴ふて我國へ輸入せられたことであるが、日本の地位が進んで彼國と相半ばすると輸入の道が絶えるに極まつて居りますから、我等が奮起して此際に佛陀の大慈悲を宣傳するならば、大旱に雲霓を望む樣で御座りませう、實に佛教は二十世紀以後の繁鎖複雜なる社會を救濟する唯一の宗教であります、唯それに必要なのは自信力であります、人間萬事自信力が活動の根本となります。

第十章　自然の趣味と人生の趣味

趣味と云ふものは仲々深遠なるものにて容易に解せらるゝものでな

い又た解し得ても人に之れを說き聞かすと云ふことは六敷しい、然かしながら自から解し且つ樂むと云ふことが大切である。

去りながら趣味は一樣ではなき故へ人々によりて各々領得したる趣味あるべし、趣味の種類は幾萬種あるか計ることが出來ない、又た趣味の程度も人の面の異なる如くに異なりて居る、是れは人々の性格學問等に關係する所大なるものである、斯くの如き種々夥多の趣味も、抽象して觀れば二つに歸するであらう、――即ち自然の趣味と人生の趣味である。

自然の趣味は實に廣大無邊である、先づ空間的に申せば天には日月星辰燦爛として輝き渡り、地には山川草木歷然として羅列して居る、日は即ち毎朝東天に紅を流かしたるが如き有樣にて登り、漸く天に中するに及てや、三千大千世界に照り渡り、光と熱とを無限に發散せり、何たる

壯嚴、何たる恩澤ぞや、日沒すれば乃ち星辰は螢光を散したるが如くに光を競ひ、時としては大月秋空に滿ちて天地清澄なることもあり、又た地上を眺むれば山岳の巍々たるあり、溪水の潺湲たるあり、定めなき波濤の白沙青松の間を打つあり、白雲疊々として南山の岫を出つることもあり、次ぎに時間的に考ふるに、春は即ち花紅柳綠の間に禽鳥の無邪氣に戲むるもあり、短昂を牽て此處彼處と逍遙する內に、いつしか新綠の頃となり、五月雨降り、杜鵑啼き、菖蒲咲く、稍ありて梅雨となる、梅雨の季節過ぐれば、炎威忽ち加はり起居に苦むと雖とも、綠陰に榻を移して涼風に吟し、北窓に藤枕を友として華眉に遊ぶも亦た俗ならず、斯かる氣節も忽ちにして謝し去り、西風颯々として梧葉を動かし、蟋蟀の促々として秋聲を報ずるの候となるなり、月は大空に滿ちて氣宇爽然、蘆花秋水、荷香風露、一段の妙趣を添ふ、久しからずして萬山錦繡を飾りて二

月の花を欺く頃の來るかと思へば、忽ちにして萬柯凋落嚴霜屋上に在り、晩鴉饑に叫びて枯木に集まり、狐狸食を求めて西疇に走るあり、風威漸く强度を增加して、黑雲累々として西山に起るかと思へば、雪降り來り、千山萬川百卉千草一樣に皚々として宛然銀世界を現出す、時に雅客の湯豆腐熱干にて、觀雪に出掛くるもあり、冬去り春來り、夏逝き秋回る、其の變化の自然にして且つ秩然たる如何なる力の仕業なりや、斯かる光景を常に觀ながら茫然たれば其れまでのことなれども、少しく注意を深くして考ふれば誠に驚嘆するに餘りあり、是れ此の風光は古來歌人の心腸を腦ましめしこと幾千萬なるを知らす、苟くも情あるものは、自然の風光に接して多少の感慨を起こさゞるものはあるまじ、而るに此の趣味は筆舌に盡すことは出來ないが、若し强て之を抽象文字にて顯さば、――自然の趣味は美にあり――自然の趣味は美にあり――自然の趣味は美にあり――と

謂ふことを得べし。

次に翻て人生を達觀するに、第一に吾人は父母養育の恩によりて成長せり、寒氣肌に透る冬の夜も、炎熱石を鎔かす夏の日も、父母の予を案ぜざる時はなし、漸く長して學校に入るや、學力優等にして他に超脱せんことを希ふ、若し成蹟良好ならば父母は自己の幸福の如くに喜ひ、若し不良の成蹟ならば、父母は自己の不幸なるが如くに感し給ふ、餘り勤勉の過くるあらば、疾病を慮き起こさぬかと憂ひ、餘り運動の過くるあらは、試驗に落第せぬかと憂ふ、漸くにして一の學校を卒業すれば、更に莫大の資本を投じて高等の學校に入學せしむ、斯くして父母一生の恩愛は專ら吾人の身上に懸かり來る、隨つて吾人の行路の善惡は父母の悲喜の岐るゝ所である、

父母に繼で最も吾人を親むものは兄弟なり、學校の休暇を偷て故郷に

歸るや、兄姉喜で停車場に迎ひ、相見て先つ無事を悅ぶ、手を携て家に到れば父母門に倚て子の來るを俟つ、乃ち堂に登り互に一禮し、父母の膝前に圍居して、茶を啜り、菓子を喰ひ、且つ談し、且つ笑ひ、和氣靄然興の盡くる所を識らず、人生之れに過くる快樂は恐らくはあるへからす、西方淨土の安樂は正に此の間に實現せられたるかと思はる、斯くして休暇も程なく過き、各々父母の膝前を辭し、兄は西に趣き、弟は東に去るや、天涯萬里を隔てゝ親子の情の相照すか如く、長は幼を想ひ幼は長を慕ひ、早く再會の期の近かんことを望む、若し封書の來るあらは急で之を披き、病あることを報すれは其の經過を聞かんことを欲し、速かに二豎の去らんことを希はさるはなし、這般の情緒は筆紙にて盡し難し。

兄弟の外には師長あり、隣人あり、朋友あり、就中朋友は尤も吾人の賴とする所なり、喜ふへきことあらは朋友に告けて共に喜はしめ、憂ふへき

ごとあらは朋友に計りて煩悶を慰籍せらる、病氣に臥せは來りて予を救ふ、花晨月夕、夏涼冬雪、相親しむへきは友人なり。

尙農夫ありて予に菜米を給し、漁夫ありて予に魚類を給し、大工は家を造り、左官は壁を塗り、書店は書物を賣り、湯屋は入浴を許す、若し斯の如きの人なかりせは吾人は如何にしてか棲息すへき、實に人生は自利利他の大行を實現すへき好劇場なり、斯かる人生を悲觀する人は其人の誤なり、此の間に存する趣味を解せさる故へ悲觀せんとす、若し這裡の消息を解し得は人生到る處として趣味の滿たさるはなし、故に君子は貧賤に素しては貧賤に行ひ、富貴に素しては富貴に行ひ、艱難に素して艱難に行ひ、入る處として從容自得せさることなきなり、然らは人生の趣味は何ぞや曰く——愛なり。——人生は愛の實現せる所なりと。

自然の美と人生の愛とを統一して、之を活潑々地に實現せしむる本體のなきごと能はす——此の本體を名けて眞なりと謂はん、——眞は宇宙の本體萬物の根源なり、眞の自然に實現するや即ち美となり、眞の人生に實現するや即ち愛となる、美と謂ひ愛と謂ふは共に眞の實現せる二方面を顯はせり、眞は美と愛とを其の屬性として二つながら之れを統一せり、去れは自然の美を解せす、人性の愛を識らさるものは共に眞に悟入すること能はす、——山花水鳥の美は眞の現はるゝ所なり、父子夫婦兄弟の愛も眞の顯はる所なり、天地人生共に眞の實現にあらさることなし、去れは自然の美を惡むものは眞理を惡むものなり、人生の愛を捨つるものは眞理を捨つるものなり、眞理を惡み眞理を捨つるものは此世に生存するの資格を自暴自棄するものなり、小兒は日夜空氣に取り圍まれ、空氣を呼吸して生存しなから之れを自覺せす、愚者は眞理の裡に保育せられなから之れを自覺せす、世間滔々たる凡夫總へて此

の自覺なし、文學者藝術家は各々眞理の屬性の或部分を捕捉しながら未だ其の本源に徹せさる故へ、眞誠の美と愛とを知らす、科學者は屬性の或部分を取りて法則を發見せんと欲すれとも、眞源に達せさることは遙かに前者に劣れり、哲學者は推理に依りて眞源を探らんと欲すれとも、夏蟬の蛛蜘の絲に罹りて脫せんと欲して愈く之れに縛せらるゝか如く、自己の推理作用に執着して却て益々正道に遠かる、――短刀直入宇宙の眞源に徹して、從容自得の妙趣に游はしむるものは獨り宗教的信仰あるのみ、此の妙境に到らすして天地に對し人生に對することは、恰かも赤兒の影を趁ふと異なることなきなり、其の世界觀人生觀は共に一睡の夢に等し。

春花咲き秋果實の熟するも眞理なり、親の子を愛し、夫の婦を愛するも眞理の幾分を實行せるなり、然れとも根源に徹底せすしては、自然の美も其の意義を殺かれ、人生の愛も其の眞趣を失はさるを得す、あらゆる衆生に先ち、此の境界に一致せし定覺者は唯た一人なり、阿彌陀如來即ち是れなり、如來には二つの大なる屬性あり、一は光明にして二は慈悲なり、其の光明は自然の美となりて顯はれ、其の慈悲は人生の愛となりて顯はるゝなり、自然の趣味と人生の趣味、共に是れ如來の賜物なり、之を自覺せし人は即ち如來の威德を自覺せし人なり。

第十一章　理想の實現

人間には必ず何等かの理想のあるもので、又是非なくてはならぬものである、理想のなき人間は木石同樣で、折角人界に生を受けた所詮のないものである、人は理想あるによりて活動し、理想あるによりて經營し、理想あるによりて奔走し、隨て又た理想あるによりて苦鬪するもので

ある、去れば人生は理想を實現せしむべき道程であると申して差支ひない。

理想とは未だ實現せざる所の未來の目的を指して謂ふのであるが、理想と空想とは大に違て居る、理想は未來に屬する冀望には相違なけれども、勤勉努力さへすれば、其の幾分を早晩事實に現はし得る可能性を有するものである、然るに空想は如何に力行して見ても到底實現し難いもの即ち可能性のなきものである、例へば高等の學課を修得して、政治家たらんと欲し、實業家たらんと欲し、學者たらんと欲し、宗教家たらんと欲するが如きは是れ理想にして、何人と雖ども勉強さへすれば、斯の如き人物と成ることが出來得るものである、尤も天稟に利鈍大小の差等はあれども、夫々の技能に應じて發達し得るものである、然るに富士山の頂きより一躍して月の世界を衝かんと企つるが如きは空想で

ある、是は如何なる怜悧なる人物と雖ども、到底及ぶべからざる所である、全體人間には斯の如き可能性のなきものである、そこで能く此理想と空想との區別を辨へて居らねば、時として意外の失敗を招くに至るなり、世間には徒らに空想を畫きて遂に失望落膽の淵に沈み、遂に自暴自棄する人が隨分多いものである。

人間の理想とする所は、多くは名譽にあらずんば金錢、金錢にあらずんば位地である、然るに其の何づれをも得ずして失敗に終はる人が多いのである、斯の如き場合には、其の理想は空想に歸したと稱すれども、是れは空想と云ふ詞を暫らく爰へ假り來りたる迄にして、決して混同すべきものではない、即ち勤勉力行して修養怠らざれば、確に可能性丈はあつたに相違ないけれ共、內外種々の事情の爲めに妨げられて、實現し得ずして終りたるに過ぎないのである、去りながら、人生に於ける此等

の理想は果して幾許の價値あるか、第一名譽と謂ふが如きものは、恰も兎角龜毛に等しきものにて、決してそれ確信頼し、當てになるものではない、愉快もある代はりには不愉快もある、金錢とか位地とか云ふが如きものも亦た然りである、其裏面には非常に複雑なる苦痛の伴ひ來るは常である、斯の如き理想を用捨なく分析して考察する時は、殆んど價値のなきものであると云ふことが容易に分かる、然るに何人も之を得んがために孜々汲々たるは何故であるか、佛教に於ては之を業執に歸せしむるのである、故に佛教に隨へば、斯の如きものを以て到底吾人の最後の目的終極の理想となすことは出來ぬ。

終極の理想は絶對無限であらねばならぬ、吾人は肉體の存する間は、如何しても相對的生活を離るゝことは出來ず、之を熱望して煩悶苦闘するのであるが、一時成功して愉快を感ずるに似たれども、其愉快は忽ち

にして轉じて失望と成り、落膽となるものにて、永久の慰安ではない、永久の慰安は唯絶待的理想を實現することによりて得らるゝのである。偖て絶待的理想を實現するの方法は如何にと云ふに、此の理想に吾人が意識全體を傾注して、此のものに信頼するに如くはない、而して肉體の存する間は相對的理想の續々發生し來る故に、到底此の絶對的理想に一致することが出來ないのである、現實に斯かる理想の全部を發生せしむるは死後を待たねばならぬ、然れども相對的生活をなして居る間でも多少絶待的理想の面影を觀ることが出來る、其故は吾人が言語の上でこそ相對だの絶待だのと區別はすれども、兩者は實體に於ては一なるものに相違ない、恰かも水と波との關係の如きもので、波を觀て居るのは即ち水を觀て居るのである。

斯かる絶對的理想を吾人は宗教的に柱して如來と云へる人格なり

と信ずるものである、如來の面影は世界のあらゆる方面を透して觀ることが出來る、現世に於て如來に信賴すれば、軈かて此の理想の實現し得る道程に歸したるものにして、死後は必ず現實に如來と一致することが出來る、是は決して空想ではない、如來に一致し得る可能性は、個人個人に必ず備はれるものにして、如來を信ずることによりて此の可能性は次第々々に明かに成りて來るのである。

是に於て問題と成るは、斯の如き理想は如何にして吾人の心中に浮び來るかと云ふことである、斯かる絶待的理想は單に觀念として吾人の心中に存在するのみならず、眞に實在して居るのである、實在して居るものを絶待的理想として取扱ふ譯には行かぬ、其故は絶待は一切の屬性を悉く領有せるものなる故に、必然的に實在して居らねばならぬ、又た此の理想を信受すれば、其の實在の力はしみじみと感ぜらるゝの

である、斯かる實在は機械的死物的のものにあらずして、無限の大活動を少しの絶間もなく演じつゝあるものである、之を吾人に引き當てゝ考ふれば、吾人の精神にも、肉體にも、外界にも、理想は不斷に活動を演じて居る、其の活動を吾人の意識中に自覺した一刹那は即ち如來を信じた一刹那である、是を名けて極速の一念と謂ふのである。

而るに靈妙なる働きをなすものは世界に澤山ある、例へば電氣の如き、音響の如き、光線の如き是れなり、此等は吾人の科學的智識を以て到底說明し盡すことの出來ぬ程、不思議なるものである、去りながら人間の意識程靈妙なるものはない、活動の微細なること、轉化の迅速なること殆んど名狀すべからざるものである、故に吾人の生活する現在の世界に於ては、靈妙なるものと云へば先づ吾人の意識を擧げねばならぬ、而して絶待的理想は靈妙の極、不思議の極なるものなれば、此物を形容せ

んと欲せば、吾人の現今の世界に於ける最も靈妙なるものを以て是に當てねばならぬ、即ち世界で最も靈妙なるものは人の意識なれば、絶待的理想も亦た意識的實在なりと考へねばならぬ、換言すれば智情意を持ちたる人格なりと信せねばならぬ、其智情意なるものは固より人間の物の如くに拙劣なるものにあらずして、發達進化の最頂點に位し、最も圓滿完全なるものと信ずべきである、此の境界は、科學的説明や、論理的研究の到底及ぶ所のものではない、唯だ信仰の力に因りて其の偉力を感得するのみである、己れの既に感得したる如來の意識を理想として吾人の智情意を練磨し、修養し行く時は、吾人が一生を透して、日々夜々此理想に近づくことが出來るのである、之を即ち信後の德と謂ふのである、然れば吾人は此世に生活する限りは、一方に於て己れの名譽、位地財産等に對する適當なる理想の要求に向て、其實現に努力勤勉するとは必要なるが、尙人生最後の目的に契はん爲に、絶對的理想を實現するとに付て一歩々々向上の路を辿り、如來と一致するよう大に奮勵し修養する樣に心懸けねばならぬ。

第十二章　無限の生命

曩きに日露の兩國は古今未曾有の大戰爭を始めた、我が親愛なる同胞兄弟は、骨を碎き血を流し、實に悲慘の極を演じた、されば互に出征將士の苦勞を思へば、感謝の涙の零ぼるゝ次第である、而して此等忠勇義烈の士が、名譽ある負傷の爲めに澁谷病院に呻吟せるものが鮮くない、乃て一片同情の意を捧げて、勇士の煩悶や無聊を慰藉したいと思ふて、曾て該病院に單獨慰問を試みたことがある、病院は曠漠たる原野、空氣爽快なる處に設けられ、宿舍は數十區に分かたれ、更に各區を數十室に

分つてある、將校は一室一人、下士卒は一室三四十人宛、收容してあつて、將校は既に百有餘名、下士卒以下約三千五六百名も居つた、余は或る士官の先導によつて、各區を巡廻し、左の如き意味でお話申した。

總て人間は肉體と精神の兩面があるもので、其兩者を比べて見ると、精神には肉體の及ばぬ一德を備へて居る、吾人が肉體の大さは五尺乃至六尺に定まり、其壽命も五十年乃至七十年位で一定の限りがあつて、到底無限に此肉體を支えて行くことは出來ない、然るに吾人の精神は頗る廣大なもので、宇宙に遍滿して居る、肉體の行かれぬ天外の事でも此精神があれば、こそ知られるのである、又此精神は永久に盡くることの無いものである、而も神や佛にも達することの出來る大威德を有して居るものである、燒けば灰となる此肉體の中には斯の如き貴重なる精神の宿つて居るものである、然し乍ら斯樣に貴重な精神も、利用の仕方に依

ては善ともなり惡ともなる、同じ鐵でも正宗の名刀にもなれば鈍刀にもなると同じことである、罪ない人を殺したり、竊盜强盜、其他種々の罪惡を犯す如き人は、折角貴重なる精神を持ちながら、惡しく利用したものと云はねばならぬ、之に反して眞の慈善を行ひ、同胞の犧牲となつて國家の安寧發展の爲に働く如きは善く利用したと云はねばならぬ、惡しく精神を利用すれば其人の生命は一代限りは愚か、其人が生きて居る時にでも人非人とか人面獸心と云はれて、人間としての貴き精神は滅亡して仕舞ふ、之に反して善く利用すると云ふと、たとひ身は寸々に擂裂されても、實に其生命は萬世不朽である。

彼の楠正成の如きは、南北朝の戰亂に際し、一族を擧げて勤王のために盡し、正義のために戰死した、斯くして楠公の肉體は何百年以前に無くなつたけれども、楠公の忠勇義烈なる精神は今日も赫々として存在し

て、我日本民族の上に生きて居る、此精神に感激して奮ひ起つた者は實に數多いことである、日本魂なるものは楠公の如き精神が結晶したものである、亦た近代には大石良雄の如き忠義正道の士もあつた、此等の人は五十年なり七十年なりで滅却して仕舞ふ肉體を犧牲にして、正義を遂げ、公道を踏んで、永遠の生命を得たのである、火にも燒けず水に溺れぬ無限なる頼母しき生命を得たのである、されば日本男兒と生れた吾々は、肉體の死と共に貴き精神も殺すと云ふ樣なツマラない事に終らずに、萬世の下にも赫々の光輝を發して生存する無限の生命を得たいものである、今回の如き世界を震動する大活動も、楠公や良雄の無限なる生命が存生して、我日本民族を指導して居るからである、無限の生命は無限なる活動と無限なる光榮慰安を持ち來すものである、何と愉快なことではないか。

扨て勇士諸君は故國を遙かに離れて、妻子を捨て財寶を措て、五尺の體軀を君國に捧げ、我等國民の爲めに奮鬪刻苦せられ、其お蔭を以て日本の光輝を世界に發揚することが出來たのは、誠に感謝するに辭のない程、喜ばしい事である、然るに諸君は或は兩眼を失ひ、或は手足を失ふて、生れも附かぬ不具の身となられたのは誠にお氣の毒千萬である、然し乍ら諸君は其肉體上に於て大損害を蒙られたけれども、其精神上に於ける利福は實に非常なもので、肉體の損傷を補ひ得て猶二倍し三倍したる利福、否無窮大の福德を得られたものと云はねばならぬ、彼の楠公や大石と同じく、諸君の精神は何千萬年の後迄も活動し生存して、後世の子孫を激勵することが出來るのである、吾人が今日楠公や大石を敬慕するが如く、後世の子孫は必ず諸君の偉大なる活動と精神に向つて、欣慕景仰するに違ひない、されば諸君は既に火も燒く能はず、水も溺

ら、能はざる無限の生命を穫得せられたのである、諸君は人生五十の定命を支配さるゝものでなく、其生命は永遠となり、無窮となつたのである、所謂「肉に死して靈に生きる」と云ふのは諸君の現況を述べた消息であろう。

而して更に諸君へ御注意申したきことは、既に無限の生命を得られた以上は、其精神を絶對無限の力、即ち如來の威力、佛の大慈悲力に御任あり、たきものである、斯くして、初めて、其無限の生命に活氣を覺え、大希望を生じ、大安心を得られるのである、如來は必ず諸君の公正なる精神を見そなはして、喜んで諸君を慈悲の懷に慈み擁護して下さるに相違ない、諸君は今世に於ては肉體的に不具となられたけれども、精神的には如來の心と相通じ、相感應することが出來て、無限なる光榮ある生命を有する佛の御兒として生れ變つたのである、父母や妻子の事について御心配なことも澤山あらふが、到底人力を以て左右することの出來るものでないから、人間萬事如來に任せて、其信仰を守りて大活動をなし、幸福なる一生を送られる樣に願いたいものである、さすれば諸君の精神は永久の生命を得て後世子孫を起たしむることを得べく、未來は幸福圓滿なる妙境に遊ぶことが出來るのである、何と愉快な運命の寵兒たる諸君ではないか、是れ今後益々諸君の御自重あらん事を希望する所以である。

第十三章　無我的道德

佛教道德の根底は無我となるに在り、人間が愛慾の心を有しながら、無我になると云ふことは頗る困難なること故へ、是れには種々なる修行が大切である、而して淨土門に於ては自から求めて修行して無我にな

れと勧むるのではない、萬事を絶待他力に打ちまかせて、たやすく此世を過ごすのである、自から無我にならんと欲すれば、却て我が附き纏ふて來る、他力に打ちまかせて仕舞へば、自から打ち拂ふべき我と云ふものが無くなり、在るものは唯だ絶待の力のみである、此の地位に安住して得たる倫理道德は頗る公明正大なるものである、法然上人が母君に送られたる書簡を此頃拜讀したが、其の文中には頗る吾人の肺肝に徹するものある故へ、諸君と共に今之を味ふて見たきものである。

〔上略〕善き事も惡しき事もいらぬことわざかなと、ふつと思ひとりて、あふ人ごとに打笑ひ、少しも心に物をためず、流れ水のながるゝ如く、ともかくもあるに任せて、胸にしばしも物を思はず、今日や死なん、明日や死なんと思ひ給はゞ物を貯へてもなにせん、人につらくあたりても、人がつらくあたるとも、よもしらぬ身にさぞあらはあれと、

惡念妄念おこり、腹が立ち、心にかなはぬ事あれ共、よし夢か現か、われ世にあればこそうらめしく、かゝる事もあれと、能々おもひとりて候はゞ、なにの思ふ事もなくなり、悠々として心全く候はん、我も人も口には後世大事といへども、心深くあさゆふ思ひいるゝ人は、萬人に一人も無く候程に、かまえて〳〵忘れ給ふまじく候〔中略〕

おしひ、ほしひ、いとをしひ、かなしひ、暑き寒き、と思ふが、みな我心にて候、こゝろと云ふものは、さら〳〵たいなきものにて候、之れを思ひつゞくる程に執心となりて、輪廻する事にて候程に、ふつと心はなきものよ、心が鬼ともなりて自を責むるなれば、心こそあだのかたきよ、煩悩が起りて心が罪を作り出してかゝるくるしき苦みを受くる事、煩悩なれば腹も立ち、いつくしきものがをしひほしひと思ふ一念が起るとも、二念を遣はず、水に書を書く如く、あらあさましやとはらりと

思ひきり、なに心なく無念無想にしておはしまし候はゞ、それこそまことの御心にて候へ、いかに日々念佛を申しても、心に四方山の事をおもひ、惡念忘念おこるなれば、佛には遠く候、心には何事を思ふとも、口に念佛さへ申せば佛に成るといふ人は、それはあまりの事、こゝろはとても善くならぬ、申す念佛をたよりにして、佛の救ひ給はんと誓ひにて、それをあやしく必得て、心には何事を思ふとも、念佛さへ申さば佛に成ると計り勸むる人は、邪見にてあさましく候、おなじくは心をよく〳〵まもり、無益事を思はざるこそまことの念佛にて候〔中略〕まことの志ある人は、人のあしき事あらば我身のうへにうけてかなしみ、人の善きことあらば我身にうけて喜び、何事もわれ人へだてなく、あしかれと思はず、人をそしらず、ねたまず。にくげいはず、つらからず、たよりなき人を詞の一つもやわらかに、おとなしやかにひきたて

で、すこしの物もにあひ〳〵に施して人を助くるこそ大慈大悲の行にて候へ、たとひ世上のならひなれば何かとうちまぎれ、免や角やうちくらし、又たひるがへし、あさましのなせる業を、あらうらめしの世やと、ふつと思ひ入りたまはゞ、罪もたまらず、切れ果てゝ、必ず生死を離れ給ふべし、云々

文々句々能く人情の機微を穿がち、さながら聖僧の說敎に遭ふの心、地あらしむ、他力の信心を獲得して、如來の大慈大悲が心の中に溢れて居る人にあらされば、斯かる文辭は出來まいと思ふ。

抑も腹が立つとか、怨めしいとか、妬ましいとか申すのは、皆な惡業煩惱であり、此の惡業煩惱は我執より生し來るものである、我に執着して我念を捨つることが出來ぬ故へ、種々なる忘念忘想がつきまとひ來るのである、我執がなくなれば本來の面目歷然として顯はれ、活潑々地の

大妙用を現じ、光風霽月の如き思ひあらしむるに至るのである。

去りながら、自分の力で我執を無くすると云ふことは、たとへば、水を以て水を洗ひ去らんと欲すると同一なり、拂はるゝものも我なり、拂はんと欲するものも我なり、能所共に我なる故へ、眞誠に無我となることは仲々難いことである、萬事を絶待他力に打ち任せて仕舞へば、求めて我を打ち拂ふの必要はない、他力にて自然に無我になさしめ玉ふ道理あり、身も心も悉皆如來の大慈悲に丸められぬれば、打ち拂はるべき我をさがし求むるの必要もなく、又た打ち拂ふべき我の力をはげます必用もない、能所を融合して唯だ如來の御力に歸せしめて戴くのである。

無我になると云ふことは、無主義、無節操、無氣力に成ることを云ふのではない、執着の心の無くなるのである、彼の主義を主張すること能はず、節操を堅むること能はず、氣力を充實せしむるにとが出來ぬのは、我執

が陰然と障をなし居る故である、千里の駒も櫪の間に繫がるれば、其の速力を示すこと能はざるが如く、如何に活潑自在の妙用を現すべき人間の心も我執のために束縛せらるゝ故へ、眞面目を發揮すること が出來ぬ、我と云ふきずなが無くなれば、吾人は主義のために全力を盡して働くことが出來るのである、無我の境に安住して活働する以上は、天地に俯仰して毫末もはづることが無くなる、是を以て其の爲す所、頗る公明正大なるものとなる、此の處まで信念の修養がなくては、健全なる道德は生し來ることはないと思ふ。

第十四章　厭世觀

世の識者或は佛敎を批評して、佛敎は厭世敎である、世の中に害あるも益する所がない、耶蘇敎は却て風敎に益する所が多いと謂ふものがあ

る、然かれとも、厭世と云ふことを穴勝に惡るいことの樣に思ふのは、抑も根本的誤謬である、此世は誠に厭であるから、復雜なる人間の交際を避けて山澤の間に放浪して、悠々風月を友とすると云ふことのみが厭世ではない、是れは偏狹不完全なる厭世觀である、換言すれば極めて局量の小さい氣儘勝手なる人の厭世思想である、例へば西行法師の如きは其適例を示めして居る、圓滿完全なる厭世觀とは唯だ此の世の不完全なることを自覺することである。

先づ此世の不完全なることを自覺せし以上は、此世を完全なる所に導くべき理想を見出さねばならぬ、是に於て厭世と謂ふことに就て、消極的意義と積極的意義との二つが分かるゝのである、消極的厭世とは此世の不完全なることを自覺して、交際社會から遠かるのである、積極的厭世とは此世の不完全なることを自覺して、而かも更に進て之を救濟

すべき理想を求むるのであるから、前者の害多くして益少きに反し、後者は益のみありて害なきものである、斯の如き意義に於ける厭世觀は是非とも此世の中になくてはならぬものである。

偖て佛教に於ける厭世觀は、以上二義の中何れに屬するかと云ふに、積極的厭世主義、即ち不完全なる世の中を救濟すべき理想を示めしたものである、先づ釋尊の求道の動機に就て考察するに、釋尊は此世の中の不完全なることを自覺された率先者である、又た救濟の理想を發明せられた先覺者である、此お方に依りて始めて極善最上の理想が顯示せられたのである、釋尊の求道の動機は、生老病死の四苦である、世の中に生老病死の四苦のあるのを觀て、生老病死有爲轉變の世の中に在りなから、常住不變なる理想を攫まうと謂ふのは、釋尊求道の動機である故に、釋尊の宗教心は世界觀から生じて居る。

乃で厭世と云ふにも種々なる區別がある通りに、求道の動機にも種々なる區別がある、罪惡觀より生ずるもあり、苦痛觀より生ずるもあり、無常觀より生ずるもある、罪惡觀と云ふのは、人世は罪惡の凝り塊である、吾人は日夜に罪惡のみを積み重ねて居る、斯かる罪惡より超脫して、淸淨潔白なる生活を指導すべき理想を求むるのである、苦痛觀と云ふのは、人世は生存競爭、優勝劣敗、弱肉强食で、苦痛に苦痛を重ねゝばならぬ、其外に水火の難もあり、盜賊の難もあり、病氣の難もあり、生別死別の難もあり、人世は殆ど苦痛の宿りである、佛敎に於ては之を三苦、四苦、八苦等と名づく、斯かる苦痛の世の中に處して、大慰安を與ふべき理想を求むるのが苦痛觀である、次に無常觀と云ふのは、此の世界は有爲轉變、窮まりなきものである、紅顏の美少年も何時の間にやら白骨と成らねばならぬ、花が咲いたと思ふと、忽ちにして散て仕舞ふ、當にして居ること

も當にならぬ樣に成る、是を以て無常の狀態以外に常住なる狀態を見附け樣と云ふのが無常觀である。

以上三の中に於て罪惡觀と苦痛觀との二は人世觀に多く傾き、無常觀は世界觀に多く傾く居る、隨て又た人世觀に多く傾くものは倫理的思想に富み、世界觀に多く傾くものは哲學的思想に富むのである、此の意を左の如く標示すれば明かになる。

厭世觀 ┌ 罪惡觀 ┐
　　 └ 苦痛觀 ┘ 人世觀 ― 倫理的（基督敎）
　　 無常觀 ― 世界觀 ― 哲學的（佛敎）

釋尊の出家發心の動機は、罪惡觀よりも苦痛觀よりも、無常觀が最も大なる力となりて居ることは明かである、生老病死を以て四苦とは名つくるものゝ、其實は是れ無常觀である、如何にして吾人は常住なる生涯

を得へきかとに釋尊の根本的問題でありたのである、數論派の哲學者を訪問なされたのも、檀特山に於ける數十年の御修行も悉く此の問題を解決せんが爲めである、釋尊所證の內容として有名なる、彼の三法印即ち諸行無常諸法無我、涅般寂靜と云へることは、此の問題を解決し得たる一大福音である。

而るに之に反して基督の求道の動機は罪惡觀が最も強いのである、彼の眼に映じたる人世はまるで罪惡の結晶である、斯かる罪惡を救濟すべき福音は何處にあるかとは彼が求道の根本問題たりしなり、而して彼は終に猶太教に之を求めざるを得なかつたのである、猶太教の神の思想を擴張して世界的になしたのが基督教である、斯の如くして彼は根本問題を解決することを得たのである。

釋尊と基督と何故に求道の動機が異なるかと云へば、恐らくは成育せ

し境遇の異なれるに由るならん、釋尊は國王の家に生まれ、順境の間に成育せられし故へ、世の中を罪惡と見るべき刺戟が最も少ないのである、而るに基督は卑賤の家に生まれ、寡婦の手にて育てられし故へ、生活の困難もありしなるべく、世の冷遇を蒙りしに相違なかるべし、隨て釋尊の如くに學問を研究し、悠々として哲學思想を練磨し、世界問題に智力を注くべき餘裕がない、謂はゞ常に逆境の間に身を處せし故へ、罪惡觀は最も彼の頭腦を刺戟したに相異あるまい、是れ兩聖の求道の動機の根本的に異なる所以である、去れば佛教の教理は人世問題よりも、世界問題の解釋に力を傾け、隨て哲學的方面は餘程發達して居る、是れは釋尊の思想が遠く後世に影響したのである、之に反して基督教は最も人世問題に傾き、隨て倫理的方面は比較的に發達して居る、是れ亦た開祖の影響である。

而るに罪惡觀たると無常觀たるとを問はず、人生觀たると世界觀たるとを論せず、何づれも一種の厭世思想なることは一致して居る、唯々厭世觀の種類が異なれるのみである、基督教は厭世教にあらざれども、佛教は厭世教なりと謂は西洋崇拜の獨斷的偏見なりと謂ふべし、且つ厭世と云ふことを耳にすれば忽ちに惡しきものと考ふるのも亦た一大謬見である、此世は不完全なる故へ、之を救ふべき理想を示めすものは最も高尚なる宗教にして、斯かる意味に於ける厭世、即ち積極的厭世主義は將來吾人の大に皷吹せんと欲する所である、婆羅門教及び猶太教は消極的厭世教にして、佛教及び基督教は積極的厭世教である、而して小乘佛教が消極的厭世に傾けるは、是れ釋尊の滅後婆羅門教の影響の、再び佛教部内に浸潤せしに由るものにして、釋尊の本意に非ることは釋尊一代の活歴史に徴して明かである。

佛教は無常觀より起こり、基督教は罪惡觀より起こりしことは、已上の所論によりて明かなることが出來た、終りに臨て一言すべきことは、佛教中淨土門は無常觀の上に更に激烈なる罪惡觀を釀すに至れり、故へに淨土門は最も厭世思想に富めるに似たり、然ども是れ吾人をして此世の不完全なることを自覺せしめ、向上の路に進趣せしむべき一大福音なりとは識らずや、然り而して此の不完全なる世の中を救ふべき最高理想は、唯だ南無阿彌陀佛の六字である、是は積極的厭世主義の根本原理である。

第十五章　苦痛觀

佛道を求むる動機には種々の區別ありて、人々の氣質境遇等によりて一樣には行かぬ、兎に角此の世界此人生に就て不滿足を感じ、夫れ以上に於て或物を求むることに相違ないのである、其中に於て最も著しき

ものは、無常觀と罪惡觀と苦痛觀である、無常觀とは、盛んなるものは衰へ、生あるものは死するが如き浮世の墓なきことを視て、常住不變なる境界を得たいと希ふ心より、佛道に入るのである、次に罪惡觀とは人生の汚れたことや、己が心の淸らかならざることを觀て、人間以上の高潔なる境界に至らんと欲して佛道に入るのである、苦痛觀とは此の世の中は苦痛が多いから、是れ以上の境界を得て苦痛を免れたしとの希望より佛道に入るのである、以上の三者は何れも厭世的の考ひより來るのであるが、總て宗教は厭世的の考ひがなくては眞面目なる信仰は起らないのである、此の世で榮耀榮華に暮し、自己の罪惡のあることを見とめない樣な人に、宗教心の起り難いのは厭世的の考がないからである、是を以て佛教に於ては力を極めて無常觀と罪惡觀と苦痛觀とを鼓吹す、是は一切衆生をして宗教心を發起せしむる方便である、就中大無

量壽經に見へたる苦痛觀を繙いて求道の緣となさん、

世人薄俗にして甚に不急の事を諍ふ、此の劇惡業苦の中に於て勤身營務し、以て自ら救濟す、尊となく卑となく、貧となく、富となく、少長男女共に錢財を愛ふ、有無同然にして憂思適さに等し、屏營として愁苦し、累念積慮し、心の爲に走使せられ安き時有ることなし、

此意味を平たく言ひ換へて見れば、世の中の人は誠に淺墓なるものにて、人生の一大事には心をかけずして肝要でもなきことに諍いを爲して居る、人間は老少不定なれば早く心の落ち附き處を辨へ置くべき筈なるに、夫れをば念頭に置かずして、唯名利の爲めにのみ狂ひ廻りて居る、多くの罪惡と多くの苦痛とがみちく〜て居る人間の中に在りて、全身を擧げて名利の爲めに勞働して、それで以て自分の慾望を滿たすことにのみ懸り果てゝ居る、夫れは位の高い人も位の低い人も、又貧しき

人も、富める人も皆な一樣である、若き人も長けたる人も、男も女も皆共に金錢のことにのみ心を苦めて居る、金錢を持たない人のみ苦勞するのではなく、御金のある人も同じく苦勞をする、彼處へ行きては苦勞し此處へ行きては苦勞し、苦勞に苦勞を積み重さねて慾の心の爲めに、追ひ廻はされて一日として安々として居ることはない、

田あれば田を憂へ、宅あれば宅を憂ふ、牛馬六畜、奴婢錢財、衣食什物、復た共に之を憂ふ、重思累息し、憂念愁怖す、横に無常の水火、盜賊、怨家、債主の爲めに焚漂却奪せられ、消散磨滅し、憂毒惨々として解くるときあることなし、憤を心中に結び、憂惱を離れず、心堅く意固くして適さに縱捨することなし、或は摧碎に座せられて、身亡び命終りぬれば之れを棄損て去る、誰れも隨ふものなし、尊貴豪富も亦た斯の患あり、憂苦萬端にして勤苦此の若し、衆の寒熱を結び、痛と共に居す。

人間の苦勞は何處まで行いても盡きないもので、田あれば水害惡作等の心配がある、家屋を持て居れば火災風災等の心配がある、家畜を持て居れば疫病等の心配がある、下女下男を使て居れば彼等の所行に就て心配がある、衣服や食物や、道具や金錢あれば盜難等の心配がある、何事に就きても重ね重ね思慮を疲らすのみである、彼れ此れ致して居る中に不意に洪水とか大火事とか、盜賊とか、或は怨を含んだ人や、借金取りの爲めに奪ひ去られ、忽ちにして無くなりたるときには、氣持ちが惡くて惡くて打解くるときがない、心中には怒りの念を挾み、之が爲めになやみ苦みが起る、心が堅た苦しくなりて少しもゆるむことがない、斯樣に苦勞をした結果は如何であるかと云ふに、病氣其他の事故の爲めに壽命の盡くるときは、一切のものは悉く此世に殘して行かねばならぬ、誰れ一人として連れ立つものはない、吾れは何千萬圓の金持なり、吾れ

には何々爵位ありと威張りて居る樣な人でも、斯る患を免がるゝことが出來ない、苦勞の多いことは矢張り此の通りである、之が爲めにいろ〳〵の病氣にかゝり、常に苦勞のみ伴ふて居る。

貧窮下劣は困乏にして常に無なり、田なければ亦た憂て田あらんことを欲す、宅なければ亦た宅あらんことを欲す、牛馬六畜、奴婢錢財衣食什物なければ亦た憂て之あらんことを欲す、適々一あれば復た一を缺く、是有れば是を少けぬ、有ること齊等ならんことを思ふ、適々具さに有りと欲へば便ち復た糜散す、是の如く憂苦して當さに復た求索すれども時に得ること能はず、思想益無く、心身俱に勞して座起安からず、憂念相隨ふ、勤苦此の若し、亦た衆の寒熱を結び、痛と共に居す下層の人間は困窮にして財幾常に空し、田地なければ田地を得たしとて苦勞す、居宅なければ居宅を得たしとて苦勞す、家畜や婢僕や金錢衣

食道具の類亦た之を得んとて苦勞す、たま〳〵一つが手に入れば又た一つが足りなくなる、是が有るかと思へば彼がない、皆な一樣に手に入れたしと思ふて居るが、どうかこうか皆な揃ふたと思ふ頃にはたちまちに復た無くなりて仕舞ふ、斯樣に辛苦の上に辛苦してあせりて見ても、先づ之で善いと思ふ時がない、考へて居ることは無駄事計りで身と心とを疲らした果には、立居にもこまる程である、心配は何處までも附き纏ひて苦勞の絶えぬことは此の如くである、矢張り之れがためにいろ〳〵の病氣にかゝり苦痛のみ伴ふて居る。

或る時は之に座して身を終へ命を天す、肯て善を爲し道を行し德に進まず、壽終はり身死して當さに獨り遠く去るべし、越向する所あれども幸惡の道能く知る者なし。

遂に其の病氣の爲めに壽命も縮めらるゝのであるが、夫れでも、美事を

營み道德を履行することはしない、而して壽命終りて後ち己れの赴くべき處へは唯だ獨り赴くのである、而るに世間の人は常にうか〳〵として居る、何れが善道やら何れが惡道やら少しも辨へて居らぬ。

世間人民、父子兄弟、夫婦家室、中外親屬、當さに相敬愛して相惜嫉することなく、有無相通じて貪惜を得ること無く、言色常に和して相違戻することと莫かるべし。

去れば其の善道の一端を示めさんに、世の中の人々、親子や、兄弟や、夫婦家内、中外の親戚の間には互ひに敬愛を專らとして、共に憎みねたみの心を起すことなく、無きものは貸し合ひをなすべし、貪慾の心を起してはならぬ、言葉附きや顏附きは、常におだやかにして、互に氣分を害する樣なことはしてはならぬ。

第十六章　融通無碍

世界は總て物の融通にて成り立て居る、融通の利くものは益々榮へ、融通の利かぬものは益々衰ふ、進歩と退歩とは全く融通の利鈍に關して居るのである。

先づ天地の間には大なる融通が行はれて居る、地上の水が蒸發して天に登り、雲となり、霧となり、雨となり、雪となりて再び地に下る、斯くて天地の間には絶えず循環して森羅萬物の化育を助けて居る、若し天地の間に水の融通がなくなる時は天地は崩潰し、動植物は枯死するに至らん、更に大切なるは空氣の融通である、風の吹くのは空氣の融通するのでありて、空氣は平均を保つ爲めに比較的寒き處より比較的暑き處に向て吹くのである、風の御陰にて氣候が程能く調和せられ、空氣も新鮮

にせらるゝのであるが、若し風が吹かなくなる時には氣候が惡るくなりて、降雨期を失ひ、草木は萎微し、動物は病死するに至るのである、水と空氣の融通は實に天地に最も大切なる者である、又動物と植物との間にも融通がある、即ち動物の口より炭酸を吐き出すと、植物は其の炭酸を吸て酸素を吐き出す、動物は又其の酸素を吸ふて身體の血液を清潔にして炭酸を吐き出すといふ樣に絶えず循環して、相互に融通し合て動植物は棲息して居るのである、若し此の融通がなかつたならば動物も植物も棲息することが出來ないのである、又人間の身體に最も大切なるは血液の融通である、血液は足の爪尖より頭の頂上まで常に融通して身體を養ふて居る、血液の融通の善き人は至て無病で運動も活潑であるが、血液の融通の善くない人は貧血症となりて常に病身となるものである、若し血液が全身に融通せぬ樣になつたならば即ち死んで

仕舞ふのである、吾人は平素成るべく働いて血液の融通を善くし、身體の健康に注意せねばならぬ。

以上は自然界の現象に就て融通の大切なることを述べたのであるが、次に人事界にも亦た融通が頗る大切である、人事界で最も大切なる融通は金である、金が不融通になると世界が不景氣となり、何等の事業も出來なくなる、金の融通の善き國家は益進歩發達し、之に反する國家は益衰ふ、個人としては益富貴となり貧賤となるのである、天地の間に空氣と水とあり、人體に血液のあると同じく、人間社會には金の融通が大切である、昔しの未開の世にありては排外思想盛にして、外國と交通することが自由でなかつたが、文明の今日では交通が自由に開け、彼我の有無を相通じ、互に文明開化を助くるものである、最も早く此に着眼した國は今日非常に榮ゆる樣になり、之に反せし國は仲々開化しないの

である、是れ即ち國家と國家との融通の必要なる理由である、斯樣なる例は一一數へ盡す譯には行ぬ。

以上の事實は皆客觀的に融通の大切なることを述べたのであるが、次に主觀的にも融通は尙更ら大切である、主觀的の融通とは即ち心の融通である、人の心と心との融通するので互に愛情もかゝり親切心も起るのである、若し心と心とが融通しない樣なことではとても溫なる交際を結ぶことは出來ぬ、親子夫婦の間柄に溫かな愛情の行はれて居ない家庭には何等の趣味も快樂もない、家庭は人間至樂の境にて、一切の苦惱は家庭の麗はしき愛情によりて打ち消さるゝのである、外出中は社會より種々なる刺戟を蒙り、夫れ相應に精神を疲勞せしめらるゝのであるが、家に歸りて家庭の溫かなる愛情によりて悉皆打ち消さるゝので、明日より更に活潑に仕事も出來る樣になるのである、夫れが家庭

が角々しく危險なることのみ多くして、少しも愛情のなき樣なことでは、家庭としては何等の價値もないのである、將來日本の社會を改良するには第一に舊來の家庭の作り方を大に改良せねばならぬとは、現今社會一般の輿論である、其の家庭に快樂がないとか愛情がないとか申すのは、つまり親子夫婦家族の間に心の融通がないからである、心の融通が出來ぬと云ふは家庭に人情に反した無理なことがあるからである、互に他の人情を犧牲にして、己れの慾望に任せて吾儘勝手な心があるては、到底心の融通が出來るものではない、人情と云ふものは仲々强き力を有するもので、人の侵害を受くることを最も嫌ふものである、故に己の情に滿足を與へんと欲せば先づ人の情にも滿足を與へねばならぬ、人の情を犧牲にし、人倫道德に反してなりとも自己のみの滿足を買はんとする樣にては、到底圓滿なる家庭を作ることは出來ぬ、家庭が

幸福圓滿で溫かなる愛情が滿ちゝて居れば、其の美風が自然に小兒に感化を與へ、知らず〻〻の間に好き人物となるのである、家庭が危險で冷かであるならば知らず〻〻の中に小兒に惡感化を與ふるのである、不良少年若くは精神病患者の大多數は家庭の不秩序不和合より發るもので、一代の善き感化は三代の後までをも潤し、一代の惡しき感化は子〻孫〻にまで惡德を遺すものである、家庭改良は我國目下の急務であるが、其の第一原理としては家庭は成るべく純良にして、無理なることを避くることが肝要である、家庭が複雜なるに從ひ一方に偏頗なる愛情が生ずる、偏頗なる愛情が生ずる故へ、家族相互に障壁を築て隱し隔てをする樣になる、秘密がある故へ危險になる、危險になる故へ互に疑の念を懷く、疑の念を懷く故へ心の融通が出來ぬ、是が家庭の治まらぬ第一原因である。

家庭に次て論ずべきことは親朋友の間の心の融通である、多くの人の交際と稱して居るのは唯だ外面一樣のことのみであり、心に左程愛情がなくても其當座の座興さへ善い加減に出來れば其れで交際の目的が濟んだと心得て居る樣であるが、是れは大變なる誤解である、特に吾人如來の愛を念じて居るものは、斯かる理想の低き交際にて滿足することは出來ぬ、斯かる低き理想を有せる人は、至誠とか、至情とか、至愛とか申すことを心得て居らぬ、唯だ其時々々の調子を合はせ、無責任なる御追從や御上手にて世の中を渡らふと云ふ考である、是れは利己主義から割り出されたる理想にて、道德宗敎の上より眺むれば甚だ面白くないことである、即ち他を愛すると云ふことよりも自家の利益と云ふことを第一に念頭に置いて居るのである、世の中が益〻複雜になり、人情が益〻輕薄に成り行くにつれて、斯かる惡風が行はるゝので

あるが、此際宗教家たるものは大に奮發せねばならぬ筈、宗教家たるものは主義のために一身を犠牲になす覺悟が肝要である、學問も名譽も、地位も犠牲にして斯かる不正義と戰ひ、以て衆生濟度の天職を盡さねばならぬ、是は佛恩報謝の第一の行である國家の恩も父母の恩も、師友親戚の恩も、此一行にて報ゆることが出來るのであります。

第十七章　道德の制裁

其一

道德は益衰へ、人情は愈輕薄となりて來ることは世の識者の常に憂ふる所であります、私は少くとも是には二の原因があるかと思ひます、即ち人口の增殖と、人智の發達であります、人口が段々に增加して參ると、生活が困難になれば競爭が烈しくきは生活が次第に困難になります、生活が困難になれば競爭が烈しく

なります、競爭が烈しくなれば人を省るの暇なくなり、我も人も自分々々の利益のみを計りて他人の利益を計ることが出來ぬ樣になり、甚だしきは人を仆してゞも自己の慾望を遂げんとするに至ることであります、若し自然の傾向に一任し置く時は、生存競爭は年を逐うて猛烈となり、誠に油斷のならぬ恐ろしき世界となるでありましやう。

それから又人智の發達も道義衰頽の原因で有うと思ひます、維新以後學問が開け、教育は盛になり、隨て人は非常に賢くなりて參りましたが、偖て人情の方はどうで有かと云ふと、却て正反對に輕薄になりて參りました、其證據には現今の壯年の人達よりも、昔風の年寄達は餘程親切な樣で有ます、同じ今日の世界に於ても東京の人よりも田舍の人に親切が餘計にある樣である、田舍の人に昔風のまだ存して居るものとすれば、即ち昔の人の親切であつたその一の證據になります、斯樣に區別

の出來て參るのは如何の譯かと申せば、つまり人智發達の結果であります、人間には智識と感情とがあります、餘り智識の方ばかりに力がはいりますると、感情の方が自然に冷かになります、此と同時に親切の心も道義の念慮も自ら薄くなります。智慧のある者が智慧のなき者を欺いたり仕したりするのも、是から起るのであります。

斯樣に論じて來ると、道德の衰頽を拒ぎ、益々之を盛ならしめんには、先づ第一に人口增殖の路を塞ぎ、次に學校を閉ぢ、教育を廢し、人智の開發を妨ぐる樣にせねばならぬかとの疑問が起りますが、是は大なる間違た考であります、國力を盛にするには是非とも人口の增殖を計り、人智の開發をも計らねばならぬ、此の二は國の爲めには至極大切なことであります、世界列國の中に置きましても、勢の盛なる國程人口の增殖も著しく、人智の開發も速かであります下り坂に向へる國は、人數も次第

に少くなり、人智も誠に魯鈍であります、斯樣に考ふれば、道德の衰頽は國の爲に危いと云ふことゝ同じく、人口の減少と人智の減退も亦た國の爲めに危いことは明であります、吾人は國の爲めには是非とも人口の增殖と人智の開發を計らねばなりませぬ、去れば道德の衰頽は如何にして拒ぐかと云ふに、是は他に方法のあるのであります、其れは何であるかと申せば則ち制裁であります、人が我儘勝手をせぬ樣に制裁をして往くのであります、制裁と申しても細かく別くれば色々御座りましやうが、私は先づ五つ通りに區別しようと思ふ、第一、國家の制裁、第二、社會の制裁、第三、家庭の制裁、第四、良心の制裁、第五、宗教の制裁であります、是より右五種の制裁に就て一通り御話し致しませう。

第一、國家の制裁と申すは、國家には必ず主權者あり立法者あり、人民がありまして、國家が國家の安寧秩序を保つ爲には國家を亂す行ある人民

を制して、惡事を働かせぬ樣にせねばならぬ、其權力は即ち法律と成りて顯はれて居ります、法律の力は仲々嚴しきもので、たとひ些少の惡事たりとも、法律に觸るゝ以上は毫末の容赦なく之を罰するのであります、若し半月計も法律の實施を廢したと假定して御覽なさい、其時は暗黑になります、盜賊が出る、姦通が行はれる、人殺しやら、火付やら、此世界は犬猫よりも一層淺間敷有樣となるでしやう、處が法律の御蔭は有難いもので、何處へ往て見ても警察もあれば監獄もあり、交番もあれば巡査もあると云ふ風で、嚴重に取締が就て居る故に、勝手な惡い事は出來ぬ樣になつて居る、西洋の古き諺に「人は人に狼なり」と云ふてあります、是は人間は利己心の強きもの故に、利慾の爲に相互に敵對して爭ふと云ふことから起たことであります、乃ち人は人に對して狼の樣なことをせぬ樣に人間らしくさせる爲めに法律が出來て居る、去れば國民の行を定

めるには國家の制裁即ち法律と云ふものが頗る大切であります。

第二に社會の制裁と申すものは、國家の制裁の樣に權力を以て抑へ付ける譯のものではありませぬ、而しながら吾人が勝手に通り拔けんとしても通り拔けることの出來ぬ强き力を持て居ります、一番分り易き處で申せば、あの人は惡い人だと云ふ評判が立つときは、世間の人は其人を相手にせぬ樣になります、是が即ち社會の制裁であります、少しく目立つ人ならば新聞で烈しく書き立てらるゝやら、演說で攻擊せらるゝやら、毛頭足場の立たぬ樣にせらるゝのであります、或は小さき所で申せば朋友には絕交せられ、親戚の仲間入は謝絕せられ、町内から別物にせられて世間に面向けのならぬ樣になるので、是れ皆社會的制裁力の然らしむる處であります、吾人が日常何事をなすにも、名譽の損せぬ樣、人に笑はれぬ樣にと大切に心掛けて、惡事をなさず、義理を缺かさぬ

様になすのは、即ち社會的制裁力を恐るゝの心あるからであります、法律に觸るゝこと計りが惡事ではありませぬ、法律に觸れない惡事の方が餘程多いのであります、法律に觸れぬ惡事は法律で抑へ付くることは出來ません、然らば其は何で抑へ付くるかと云へば、即ち社會的制裁力の外にはないのであります、法律的制裁と社會的制裁とを比較する時は、社會的制裁の方が範圍が大きくて時間も長く、隨て力が餘程強いのであります、何故かと申せば、如何なる罪人なりとも、法律の命じた丈け義務を果たせば其れで法律上の責は免かれます、其以上に及ぼす權力は法律にはありませぬ、然しながら、一旦法律の罪人となりた以上は、たとい法律上の義務を果した後と雖ども社會は仲々承知しませぬ、而して法律の方から申せば、一年間の重禁錮も相濟し、追徵金も罰金も出して仕舞へば、其れで役目が濟で居ります、而かし、其れを終た後如何かであるかと申せば、世界に立て重要の地位に立たんと欲しても、誰も難有戴くものがありませぬ、復び元の如くに肩幅をきかせることが出來ませぬ、其れは何故かと申すと、社會的制裁が嚴として存して居るからであります、去れば法律的制裁よりも、社會的制裁の方が力の餘程大なることが分ります、人のうはさも七十五日と申すこともあれども、仲々七十五日位の處ではありませぬ、是を以て道德を盛に致しまするには、社會の制裁を嚴重に致さねばなりませぬ。

第三番目には家庭の制裁でありまし　其二

人間の最も大切な事で、たとひ何百萬兩の金持でも、一家中相互に猜忌嫉妬の念を抱き、彼此相互に疑ひの心を持て家内の心と心とが打解けぬならば、誠に不仕合せな貧乏な家と申さねばならぬ、又た裏棚住居を

致して居りましても、一家和合して、相互に助け合ふて仲好く暮して参らねばならば、其れは仲々幸福な事であります、家庭の楽と云ふものは、口にも筆にも盡されぬ趣味のあるものであります、左様になすには、家庭を出來得る限り純潔にして、互に氣儘勝手の情を制し、隠くし隔てのない様にせねばなりませぬ、そこで矢張り家庭の制裁が最も必要であります、夫は妻を愛して、其心を敎へ導き、妻は夫に柔順にして夫の事業を助け、若し過ちあれば親切に諫言をなし、親子の間も斯様に致して参りまする、自然に心が平和に和成り、悪い事も出來ぬ様になります、社會の制裁も大切なれども、社會に知られる迄には多少の時日を要します、家庭に於ては日夜寢食を共にし毎日面を見合せて居る事故に、悪事は最も知れ易い、從て吾人日常の行爲に知らずの間に大なる制裁が加へられて居るのであります、故に吾人は社會の制裁よりも家庭の制

裁が大なる力の在ることを認むるのであります。

扨て上來陳べました通り、道德の制裁には法律の制裁も勿論大切なものには相違ありませぬけれども、吾人は未だ法律計で充分滿足することが出來ないのであります、法律が細かくなれば法網を逃がるゝの術も巧になります、又た法律の知識があれば逃げる路をも上手に知るのであります、其證據には法律が綿密になればなる程罪人の數を多く生じ、法律を知らぬ人よりも法律を知れる人に罪人が多い様であります、夫故に或程度迄は法律の制裁は有功なれども、何處までもと云ふ譯には參りませぬ、次に社會の制裁も隨分結構なれども、是も亦た充分に安心がなりませぬ、社會は公平なるに似て不公平な處があります、隨分學問もあり德行の高い人でも、左程社會から尊重せられずして、却て横着な輕薄な人で、重要の地位に座りて威張りて居る人もあります、名譽を

得ねばならぬ人が左程名譽を得ず何でもない人が一寸した事から名譽を博することがあります、社會は公平なれども隨分欺かれ易いものです、少しく才智のある人は社會を欺くことが出來ます、されば社會の制裁も充分當にはなりませぬ、第三家庭の制裁は先に申しました通り法律の制裁や社會の制裁に比しては、隨分有力なるものなれ共、是れ亦た滿足の出來ない點があります、何故と申すに、女房を欺いて惡事を働いたり、又た子は親の目を掠めて放蕩すると云ふことは、世間に少なくはありませぬ、そうして見れば家庭の制裁も亦た完全なものではありませぬ、斯樣に考へ來りましたならば、國家の制裁も賴むに足らず、社會又は家庭の制裁も賴むに足らずといふことになります、是は如何なることを示すかと云へば、外部から來る制裁と云ふものは、總して賴むべきものでないと云ふことになります、然らば吾人は如何なるものによ

りて其行爲を支配して行くかと申せば、必ず內部の制裁に俟つより外にはありませぬ、其の內部の制裁は何であるかと申すと、先に擧げました通り第四の良心の制裁と、第五の宗敎の制裁であります、之を表に作りて見ますると左の如くであります。

道德の制裁
- 外部の制裁
  - 第一、國家の制裁
  - 第二、社會の制裁
  - 第三、家庭の制裁
- 內部の制裁
  - 第四、良心の制裁
  - 第五、宗敎の制裁

第四に良心の制裁と申すは、人間天賦の本心であります、人間は先天的に良き心を持て居りますけれども、生長して社會の事物に接するに及びて、段々情慾や色慾の心起りて、怒りの心怨みの心、嫉妬の心、猜忌の心、詐僞と云ふ樣な恐ろしき汚たなき心を生じます、又た輕きものは、御追

従をしたり、二枚舌を弄したり、偽善を装ふたり、種々雑多な面白ない心を生じて、天賦の良心を掩ひ隠すのであります、是は丁度月に群雲の懸れる如く、鏡に曇りの懸れる様なもので、雲や曇りを拂ひのけさへすれば、本来の光りは有り有りと明るく成りて參ります、此の良心と申すものは、人間の心の奥底に「シャン」と座りて居るもので、いつでも離れると云ふことはありませぬ、茶を飲む時でも働く時でも、何をするときでも、喰つ付いて居ります、故に法律や、社會や、家庭は、人の知らぬ間には、いくらも欺く事は出來ますが、良心ばかりは倒底欺く事は出來ませぬ、其證據には、盗人が物を盗む時には、苦しき思ひを致すと申します、是れが良心であります、人を殺す様な大悪人でも、三才の小兒が水中に溺れて死なんとして居るのを見れば、必ず弁り寄りて救ひ上ぐる氣に成ります、此危機一髪の間には、名利の心は少しもありませぬ、斯かる善心は何

處よりか來るかと申すに、即ち本來の良心が光を發したのであります、如何に悪人でも何處かに良心を持て居ります、但だ平素は私慾の心に隠くされて居るのであります是に付いて面白き話があります。

昔し江戸に慾の深い婆さんがありました、一人暮しにて金を溜めることを唯一の樂と仕て居りましたが、盗難を氣遣ひまして、味噌桶の底へ金を仕舞ひ込み、外より歸りて、味噌桶の金を取り出しては喜で居ました、スルト長屋の悪い一人の男が之を不審に思ひ、婆さんの留守中に秘蔵の味噌漬けを食てやらうと思ふて、手を入れてさぐりたれば、豈に計らんや莫大な金がある故る、天の恵と喜で取りて歸りました、佛ならぬ婆さんの事故る、晩方に歸りて例の金をしらべんと致しましたれども、見當りませぬ、乃で時の江戸町奉行大岡越前守へ訴へました、越前守は、長屋の者が怪いと思はれて、殘らず白洲へ呼び出

して吟味せられたれども、白狀するものがありませぬ、そこで越前守は己れの方には證據がある、アノ味噌桶へ手を入れたものは、今でも味噌の香ひがするに違ひない、此より一人々々に穿鑿すべしと申し渡されました處が、或る一人が自分の手の香ひを嗅いで居りました、それで直ぐに犯罪人が上つたと云ふことであります。

是は人間といふものは自分の良心を欺く事の出來ぬ證據であります、斯樣な話は西洋諸國にも澤山あります、此等の話は小兒だましの樣ですけれども、誠に無邪氣な面白い話しであります、吾人が人の知らぬ處に於ても、俯仰天地に恥ぢざる公明正大な働を致すのには、良心の制裁が一番に慥かであります、親が小供を教育するにも、幼少の頃より良心を發達させる樣にせねばならぬ、馬鹿可愛がりに可愛がりて、小供の時より遊樂や贅澤な事のみに心を向けさして、起居動作仁義禮節のしま

りを習慣附ける樣に置きますと、成長しても横着なヅルケタ惡い人間となりて、良心も何も打ち忘れて仕舞ふ樣になります、其良心を小兒の中から發達させることが肝要でありますが、大人は尙更ら此に注意を向けて居らねばなりませぬ、大人は情慾が發達致して居りますゆゑ、此慾のためには常に良心が掩はれます、又た我が妻や子供の慾の爲めに人の爲すまじき事をも平然とする樣になります、而して義理を破りたり、二枚舌を弄することを何とも思ひませぬ、此皆妻子の愛慾の爲めに天賦の良心が掩はれて、人に對する義理を破るからであります。

其三

以上法律の制裁、社會の制裁、家庭の制裁、良心の制裁に就て大畧述べ來りしが最後に來るのは宗教の制裁であります、宗教は是等以上の大制裁力を有するものにして、如何なる種類の制裁と雖も之に勝さる力あ

るものはないのであります、宗教は人の心を奥底から感化すべき功力を持ちて居るもので、是に就ては先づ宗教とは如何なるものかと云ふことを一言申さねばなりませぬ。

宗教の定義に就ては學者に隨て種々申す樣でありますが、併し宗教と云ふ以上は人間以上の大覺者を立てないでは價値がない樣に思はれる、又た人間以上の大威力を信せぬ位ならば別に宗教と云ふ特別の名稱を設け置く必要なし普通に申す倫理とか道德とかにて充分であります、既に倫理道德以外に宗教と云ふ名稱の存する以上は何等かの特徵がなくてはならぬ、それは人間以上の大威力者の存在を信ずることであります、此の方が何となく有難い樣な考がする、又た功能も慥かに勝れて居りまするので、私は人間以上の大威力者の存在を見とめない樣なことでは、嚴密なる意味にては宗教と申すことは出來ないと思ふの

であります。

宗教を斯樣に考へたる上は、宗教の定義は左の如く申すことが出來ます、宗教とは人間以上の實在との關係是れなり、換言すれば人と佛との關係であつて、我々が佛を信ずることによりて宗教は存在して居るのであります、佛と云ふ概念を取り去りて仕舞ふ時は、最早や是と同時に宗教は無くなるのであると思ひます。

佛の存在を信ずると同時に、佛の力が浸々と我身に感せらるゝのであります、まして、佛を未だ信せぬ以前と雖も、勿論佛の力を蒙りて居るには相違なけれども、吾人の心が佛の方に向はぬゆへ之を自覺することは出來ませぬ、佛を信じたのは即ち佛を知りたので、佛を知りたのは即ち佛の力を自覺したのであります。

佛は晝夜不斷に我等を照覽し玉ふもので、如何なる暗黑なる處と雖ど

も佛の照覽の到り屆かぬと云ふことはありませぬ、否な佛の光明には晴黑と云ふことはないのであります、我等は誰も知らぬと思ふて居つても、佛は常に我等を監督しました故に、我等の罪惡は包み隱す處がありませぬ、手足や口先きに顯はすことのみではなく、心の中に思ふことにしても、佛は早く見すかし玉ふことなれば、我等は到底佛の明を掩ふことは出來ませぬ、太陽の光りは雲や霧の爲めに覆はるれども、佛の光を覆ふ程のものは此の世には一つもありませぬ、佛の此の如き威神力を信じた人の行動云爲は如何であります。

我々は法律を欺くことあり、社會を欺くこともあり、家庭を欺くこともあり、又自から自己の良心を欺くこともあります、然れども佛を欺くことは出來ませぬ、去れば佛を信じた以上は佛の冥見を恥ぢ懼るゝの心がなくてはならぬ、我等は父母や師長を信ずると共に其の威風を懼る

るの心は自から湧き出るものであるが、佛を信じた人は佛を愛すると同時に佛の冥見に對して恥ぢ懼るゝといふ心は是非起るべき筈である、此の心の起らぬのは未だ眞實に佛を信ぜぬ故であらふと思ひます。

我宗祖は常に如來を憶念せよと仰せられ、又蓮如上人は行住座臥時處を擇ばず念佛申せと仰せられました、常に我心中に如來を念ずれば面のあたり如來の前に座し居るも同樣であります、十露盤を取る時も、鋤鍬を取る時も、談話をなす時も、何をなす時も常に如來を忘れぬ樣にせねばなりませぬ、如來を忘れぬ樣に、さへすれば萬事其れでよいのであります、外に六かゝ敷い理屈も何にも必要はない、倫理だの道德だのと六かゝ敷きことを云へば却て心を惑はすのであります、甲の人がよいと思ふて居る理屈でも、乙の人から見れば惡るい、或る時處にては善かりしものも、時處異なる時は隨つて惡しくなることがある、理屈で定むると

と云ふものは實賤躬行の上には餘り利益ありとは思はれませぬ、理屈な巧みに弁べ立つる學者先生の道話よりも常にお念佛を喜ぶ田舍の爺さん婆さんの方が却て道に合する樣であります。

宗敎は六ケ敷き理屈を謂はないで人を導くのが本領であります、是を以て單に如來を信ずと云ふこと一つで一切の倫理問題は盡て居まして、道德の標準だの、道德の目的だのと複雜なる講釋は何等の必要もありませぬ、是れは唯だ吾人の智識慾を滿たすのみにて、實賤躬行には殆ど功能がない、宗敎は學問ではない、實賤躬行を目的となすのであつて、實行の伴はざる理屈は信仰の大禁物であります、唯だ如來を信ずればよ如來の御名が吾人の心中にみち〳〵て下さるゝによりて、之より湧き出る所の言語動作は、幾分か如來の御心に叶ふことが出來ます、人間の境界に在りながら、幾分たりとも如來に似通ふと云ふことは大變貴い

ことではありますまいか、此れに勝さる所の健全なる道德はありませぬ、理屈で作りた道德は何時でも勝手に理屈で破ることが出來るが、如來の御心が一旦我心の中に宿つたならば、其の堅きことは盤石の如くで破ることは出來ませぬ、されば如來に任かせて事をなす中に、知らず識らず正義を實行するのであるは、是れ即如來の制裁の顯はれ來るのであります、其他の制裁は皆人間より來る制裁なれども、宗敎の制裁は如來より來るのであるから、宗敎の制裁程健全なものはありませぬ、然し茲に注意すべきは「道德の爲めに宗敎を信ずるのでなく、道德は宗敎を信ぜし結果なり」と云ふことであります。

如斯先づザット五種の道德的制裁があります、吾々の行住座臥を通じ、人なき孤獨なる折でも、時を撰ばず、處を嫌はず、絶えず吾人に制裁を與へて向上の道を辿らすのは、實に第五の宗敎的制裁でありまして、此

宗教的制裁があつて初て人生の光榮がある、ので、初めの四つの制裁も價値があることになつて參ります、要するに制裁ぢや何ぢやと申しまして、空論に終つては何の役にも立ちませぬから、よく宗教的制裁の妙趣を翫味して、國家や社會の制裁を受る迄もなく、大に世の風教に資する處が無くてはなりませぬ。

第十八章　靈魂の不滅

北村敎嚴

其一

此世の生命の終はると共に、吾人の魂は無くなるものなるか、若しくは死後迄も魂は繼續するものであるかと云ふことは古來の大問題である、是迄の習慣にては宗教信者は靈魂不滅說を奉じ、無宗教者は靈魂滅亡說に傾きて居る、若し靈魂が此世限りで無くなるものとせば、未來と

か、地獄とか、極樂とか、又神とか、佛とか云ふことは、全く無學な者の迷信となりて仕まふ、故に宗教信者は他迄も靈魂不滅說を奉じて居る。

而るに無宗教家の立場より論ずる時は、人間の精神と云ふものは、肉體を離れて別に存在して居るものではない、腦髓や神經の活動其ものが即ち精神である、靈魂と云ふが如き無形の物が、體內の何れかに宿りて、其れから精神作用の起り來ると云ふが如きことは、決して有り得べき筈はない、是を以て肉體を燒いて灰になさば、精神も同時に無くなるもので、恰かも油の盡きて燈火の無く成ると同樣であると云ふ、斯かる說は最も普通に唱へらるゝ所である。

乃で靈魂が滅であるか、不滅であるかと云ふことを論ずる先決問題として、靈魂なるものが有るか無きかと云ふことを極めねばならぬ。

佛敎に於ては三世因果と云ふことが最上の眞理と成りて居れども、靈

魂と云ふ樣な固まりたるものが一つありて、過去より現在、現在より未來へ轉輾してころがり行くものだとは謂はぬ。門外の人の多くは、佛教の三世因果とか、因緣業感と云ふことを誤解して居る樣である。三世因果と云ふことに伴ふて刹那生滅と云ふことが大切である、佛教に隨へば、獨り吾人の精神のみならず、天地萬有は總じて瞬間毎に生滅して居るのである、前の瞬間に滅する途端に後の瞬間に生ずるのである、生じては滅し、滅しては生じ瞬間毎に生滅しつゝ繼續して行くのは、一切の物質皆な一樣である、夫れは物質が前の瞬間に滅する途端に其の習氣（潜勢力）を後に殘して、其習氣によりて後の瞬間の物質が生ずるものである、此の生滅の間際は頗る微細なるものなれば、吾人は之れを識別することが出來ぬ故へ、恰かも物質が恒存して居る樣に見ゆるなり、物質すら既に斯の如きものなれば、吾人の精神は勿論生滅しつゝ繼續し行く

に相違ない、其の生滅しつゝ繼續し行く具合は、恰かも珠數玉を繫だ樣な者である。

吾人の精神作用は、一生を通して流れをなして居る、壽命が短かければ、精神の流れが短かい、壽命が長ければ、精神の流れも亦た隨て長い、此の流れを中途にて切斷して其の切口を觀ると假想せよ、此の切口の表面には種々なる觀念あり、例へば「甲」「乙」「丙」「丁」等の如し、此等の數多の觀念の中に於て、最も力の强き觀念が中心となりて、殘りの觀念は其の周圍に存在して居る、第一の瞬間に「甲」が最も有力なる時は、「乙」「丙」「丁」等は此れに隨伴して居る、然るに「甲」のみが何時までも獨りで勢力を占めて居る譯には行かぬ、自然に「甲」の力が衰へて乙の强く成り來ることあり、此に於て第二の瞬間には「乙」の力が最も强くなりて、第二の瞬間に於ける精神の中心となり、他の觀念は隨伴と成る、此れと同樣にて第三の瞬間に

は「丙」が中心となり第四の瞬間には「丁」が中心となる。斯の如く各瞬間に於ける最も有力なる觀念が中心と成りて精神を支配しつゝ、一條の流れを成して居るのが人間の意識である、是れは恰かも昔しの時代の革命の樣なもので、先づ織田信長が最も有力なりしを以て天下を統一し、織田氏亡びて豐臣氏起り、豐臣氏亡びて德川氏起ると云ふ樣なものである、吾人の意識作用は瞬間毎に交替はすれども、前後關係がないと云ふのではない、第一の瞬間の狀態が原因となりて第二の瞬間の狀態を呼び起こし、第二の瞬間の狀態が原因となりて第三の狀態を呼び起し、次で第四第五皆な斯の如くである、新陳代謝しながら前後因果の關係を以て聯續して行くのである、佛敎に於ける刹那生滅とか、三世因果とか申すことは斯の如き意味のことである、此の精神狀態其物を指して靈魂と云のであります、此れ以外に靈魂と云べき餘計

なものは何にもないのである。

斯に至りて一の難問が生じ來るのである。――此の世一生丈の間は以上の說明にて充分なれども、吾人が死した後までも斯樣な狀體が繼續するとは云ふことは實に受け取り難しと、――是れは實に尤もな疑問であるが、然かし予輩は之を信ずる丈の充分なる理由を持ちて居る、前に申した通り、人間の靈魂は珠數玉を絡らねた樣なものであるから、一一の玉と玉との間には密着なる關係があるのである、第一の玉の動く方は獨り第二の玉に影響を及ぼすのみならず、一生を透して無數の玉に對して、間接若しくは直接に影響するものである、第二第三乃至第五十第百等も皆な同樣である、去れば後の玉になれば成る程、前の玉の影響を受くる數が多くなる、而して最後の玉は何れであるかと云ふと、愈々死して仕舞ふと云ふ最後の一刹那である、此の最後の一刹那の玉は、過

去五十年間乃至八十年間に於ける無限の玉の影響が悉皆集注して居るのである、斯の如く複雑なる影響の籠れる最後の玉の運動は、何物に向て其影響を及ぼすべきか、――是れ頗る重要なる問題である。

勢力不滅と云ふことは物理學上に於ける宇宙の原則である、而るに世の中に何の勢力が微妙だと云ふに、人間の精神程微妙なるものはない、電氣や光線や音響の如きものも、到底精神作用の微妙にして而かも迅速なるには及ばない、比較的劣りたる電氣等の勢力すら不滅なりとせば、其れ以上の精神作用は勿論不滅でなくてはならぬ、然り而して臨終の最後の一刹那の玉は、過去數十年間の無限の勢力を籠めつゝ、更に次の物に向て影響せねばならぬ、――換言すれば最後の意識狀態の終りを告ぐると同時に、次の意識狀態が起らねばならぬ、是れ即ち後生である、今生の最後の意識狀態が滅する途端に、後生の最初の意識狀態が始

まるのである、後生を惹起すべき直接の原因は、今生の最後の意識狀態に原因するのである、今生の最後の意識狀態は、今生の總ての意識を悉皆原因となして起りた結果である、今生に於て第一の玉と第二の玉とが直ちに接續すると同樣に今生の最後の玉と、後生の最初の玉とが相ひ接續するのである。果して然らば後生の意識狀態は如何なるものかと、問はゞ、是れは吾人の未だ實驗せぬこと故へ、何とも申し樣がない、兎も角も今生の終りと後生の初めとは間髪を容れざること丈は疑ふことは出來ぬ、靈魂不滅に對する予輩の信仰は右の通りである。

靈魂不滅説に就て北村君に質す

石橋臥波

其二

靈魂の有無、本質、滅不滅といふことは古來學者宗教家が困難なる問題

として居るものゝ一つで、今日にても尙諸説紛々！容易に解決を見ることの出來ないのであるが、頃ろ北村敎嚴君の靈魂不滅論が出たので、それを讀んで見ると、全然佛敎にいふ處の説であるといふことは、文中に「佛敎に從へば」と書いてあるによるも明白であるが、しかし、予輩は之を信ずるだけの理由を持つて居る」といふ樣な點から見ると、それが即ち北村君自身の説になつて居る、即ち氏それ自身の信仰であると思はれる、それは何れにしても予輩の立場から見て疑ひの存する所があるので、次にその要點を擧げて君の説明を煩はしたいのである。

第一君の説によれば、靈魂とは吾人の一生を通じて生滅しつゝ新陳代謝しながら、因果の關係を以て聯續して流れをなして居る精神狀態そのものであるとして居ると思はれるが、果して然りとすれば、刹那生滅を根本義として、物界心界皆流轉して暫くも止まらずといふ立場から

説明したものとせなければならぬ、この萬法流轉といふことはヘラクライトスも嘗て唱へた説で、現代の心理學者も亦吾人の意識は常に轉移しつゝあるとして、意識の流れといふ名をつけて居る位であるから、強ち否定するのでは無いが、こゝに一つ説明を求めねばならぬは、常に因果の連鎖によつて流れをなして居る精神狀態といふのは、吾人が現に自覺して居る所謂醒覺して居る精神狀態即ち意識のことであるか、換言すれば現象としての精神作用をいふのであるか、第一にこれが説明を求めねばならぬ。

その次に人間の靈魂は珠數玉を絡ねた樣なもので、各瞬間に於ける最も有力な觀念が中心となつて、精神を支配しつゝ一條の流れを成し、後の玉になればなる程、前の玉の影響を受くることが多くなつて、愈々死して仕舞ふと云ふ最後の一刹那の玉には、過去の無限の玉の影響が悉

皆集注して居るといふが、人間の精神は果して珠數玉を絡いだ如きものであるか、所謂生と滅との關係は、第一瞬間の狀態と第二瞬間に於ける狀態とは因果の關係によつて同一狀態でない、必ず幾分かの變化を受けて居るといふ意義であるが、思ふに必ず生滅時を同じうして前後あることなし、即ち前の瞬間に滅する途端に、その習氣（潛勢力）を殘して後の精神狀態を生じ、この生滅の間際は頗る微妙にして吾人自ら知ることが出來ぬと答へるであらうが、こゝに疑ひが存するのである、線は點の集合である、三世は刹那の連續であるとは人がよくいふことであるが、かゝる論據であるか、又その生と滅との間を連續するものは潛勢力であるとは現代自然化學者のいふエネルギーであるか。

第三に勢力不滅といふことが宇宙の原則であるに、物質よりも何物よりも微妙なる、人間の精神が、今生の最後の意識狀態がそのまゝ滅すと

いふことはないとして、靈魂の不滅を信仰せねばならぬとの結論であるが、之によつて見ると君の靈魂は勢力即ちエネルギー説で、嘗て井上博士（圓了）の靈魂不滅説と同一のものと思はれる、果してそれならば予は君の此結論には反對せねばならぬと信ずるのである、如何となれば精神作用を以て物質的エネルギー不滅と同一の論法によつて、何に移り行くかは知らぬとしても、滅失してしまうものと信ずることが出來ないといふのは、實に薄弱な論據といはねばならぬ、佛教の業に於ける說は如何にもあれ、君の所說による時は、現象的意識が即ち靈魂であるとより外は見えない、それならば決して肉體の死後にも不滅であるといふことは出來ない、又靈魂を勢力即ちエネルギーとするならば、エネルギーには變化はあるも、發達進化といふことも無く、人間心意の進化發達を說明することが出來ざるのみならず、物理的のエネルギーは異

にして、精神作用には近づくに從つて次第に衰へて來て、一生涯の勢力を集合蓄積することは不可能である、故にこの意味に於ける靈魂不滅は信ずることが出來ないと云はねばならぬ。

かくいへば、予の說は全然靈魂滅失であるかの如くならんも、予はある意味に於ては決して滅失するとはいはないのである、幸ひに以上述べた點について高說を聽くことを得たなら、更に所信を明かにして敎を乞ふつもりである。

其三

靈魂不滅說に就て石橋君の質疑に答ふ

北村敎嚴

予輩は曩きに靈魂不滅說に就て聊か鄙見を陳べ置きたるが、忽ち石橋臥波君の質問を受けることゝ成つた、予輩は不幸にして未だ貴下の溫容に接せずと雖とも、更に貴下の質問に答ふべき義務あることを自覺すると同時に、現今多くは實利主義にのみ傾く世の中なるに、貴下の如き精神問題に就て眞摯なる研究者の在ることを深く喜ぶものである。

第一問　靈魂とは現象としての意識作用を云ふのであるか――此の質問に對しては、予輩は然りと斷言するのである、靈魂なるものは哲學にて謂ふ所の本體にもあらず、實在にもあらず、又た佛敎にて謂ふ所の眞如にもあらず、法性にもあらず、因果の連鎖によりて流れを成して居る精神的現象其ものである、是は予輩の意見としてのみ斷言するにあらずして、佛敎の靈魂說は即ち是れなりと解釋するに躊躇せぬのである、殊に俱舍論の刹那生滅說は「ヘラクライトス」の萬物流轉說と同樣にて、決して靈魂と云ふ一種の我の實在せることを主張するものにあらず、況して大乘佛敎に於てをや、若し靈魂にして實在とか眞如とか云ふ

が如きものなりとせば、其の滅と不滅とは最初から議論とはならぬのである、故に是は現象に相違ない、現象に相違なしとすれば、必ず因果の連鎖によりて流れをなすものに相違ない、此の點丈けには、佛教の所說と現今の心理學の所說と異なる所はないが、唯だ異なる所は、佛教に於てば因果の連鎖は未來迄も繼續すると云ふに反して、科學者は今世の肉體組織の崩解すると同時に、斯かる連鎖は斷絕すべしと云ふのである。

第二問　人間の靈魂は珠數玉を連らねた樣なもので、其の玉と玉とを聯續せしむるものは「エネルギー」であるか――既に靈魂は生滅轉化止むことなき現象なりとせば、前の瞬間と後の瞬間と相ひ繫ぎ合ふ狀體を珠數玉に喩へたらば最も解り易すからうと思ふ、前の瞬間には特殊の觀念が中心となりて他の觀念は之に隨伴し、次の瞬間には此の觀念

を壓抑して他の觀念之に代り、次第々々に生滅轉化し行く狀體を形式に顯はしたならば、珠數玉の樣になるであらう、かかる前後の狀態が相ひ聯續するに就ては、必ずや其の間に一種の潛勢力がなくてはならぬ、何等の潛勢力なくして、全く異なりたるものが聯續し得べき筈がない、恰かも糸心がなくては珠數玉が聯續せざると同樣であると思ふ。

然るに、此の潛勢力を以て自然科學者の所謂「エネルギー」と同樣に見做すことは予輩の取らざる所で、寧ろ反對するものである、運動が變して熱となると謂ふが如き機械的說明を以て、かかる微妙なる問題が解決の出來るものではない、此處が予輩が科學者にあらずして、宗教信者たる所以なりと自覺して居るのである、予輩はかかる潛勢力は佛教に所謂業種若しくは習氣と云ふが如きものなりと信じて居る、此の業種とか習氣とか云ふものは、即ち精神的現象界に行はるゝ所の事實である、

然れども生滅轉化しつゝある精神的現象と異なりたるもの（即ち習氣）が各瞬間に於ける意識中に在りと云ふには非ずして、精神的現象其の物の力を名けて習氣と云ふのである、去れば此の習氣を以て物質的現象界に比較を求むる時は、「エネルギー」と云ふが如きものに相當すべしと云ふこと迄は斷言し得れども、「エネルギー」と同一なりと云ふことは到底斷言出來ぬのである。

由來或る極端なる哲學者の如くに、一切世界を精神的事實にのみ歸せしめんと擬することの越權なると同じく、精神的事實を悉く物理的に解釋せんと欲する科學者の意見には贊成することが出來ぬ、其の故は物質界の事實も、精神界の事實も等しく是れ現象なり、而して物質界の事實のみにても、其の靈妙不思議なること人智の測量すべからざるものあるが、其れよりも更に靈妙を極むるものは人間の精神である、此の精

神を物質界に於ける「エネルギー」にて說明せんと擬することは、餘りに大膽に過ぐること丶思ふ、予輩は如何しても習氣と云ふが如き精神の力を假想せざれば精神問題は解決の出來ぬものと信ずるのである。

然からば吾人の精神は如何にして習氣と云へる潛勢力を包藏するに至りしか、又何故に此の力は永遠不滅のものなりや――此問題は純正哲學に歸せねはならぬ、凡そ物にせよ心にせよ、宇宙の一切諸現象は悉く宇宙の實在の活動である、實在其の物の活動する所は即ち心とも成り物とも成る、恰かも水が千波萬浪を起して橫波縱波相互に影響しつゝ活躍せるが如きものなるべし、されば心の活動とは即ち實在の本來固有の活動にして、實在の永遠不滅なるが如くに、心の活動力も亦た不滅である、其の心の活動の顯在的なるは各瞬間に於ける意識狀體にして、其の潛在的なるものは即ち潛勢力である、是れ即ち習氣である、顯在

的とは、吾人の自覺に上ると云ふ謂にして、潛在的とは吾人の自覺に上らぬと云ふ謂である、予輩は科學者の機械的説明を以ては宇宙の秘奥は到底捕捉出來ぬと想ふ。

第三問　勢力不滅説に據りて靈魂不滅説を論ぜんと欲するか――此の貿問の解答は第二問の解答中に既に盡きて居る、靈魂は勿論エネルギーと同一ではない、又た現象的意識以外に別に靈魂と云ふが如き我の在ると云ふ説は、寧ろ佛敎の大に忌む所となりて居るので、斯かる我執を打破せんがために佛敎は發達せしものと見ても宜しい、かゝる現象的意識は、單に現象としてのみ看取する時は、心理學で云ふ意識と佛敎家の云ふ靈魂と殆んど一ではあるが、此の現象たるや心理學者の云ふが如き單一なる現象にはあらずして、宇宙の實在（假りに眞如と名づく）の活動其のものが、即ち吾人の現象的意識であると云ふことは佛敎の

哲學的なる所以を示めせるものにして、予輩の靈魂不滅の信仰は即ち此の基礎の上に築かれて在るのである、是を以て實在と云ふ觀念を離れざる現象的意識ならでは不滅と云ふことは論せられぬ、實在を離れざる現象が因果の關係を以て相ひ聯續して居るのである去れば予輩の靈魂とは現象的意識に過ぎざれども、其の一面には實在と云ふ觀念が伴ふて居るのである、前號には此處まで論ずることが出來なかつた、貴問に答ふる所、大略以上の如くである、終りに臨で更に一言致し度きことは、世の學者或は兒孫の繁榮を以て靈魂不滅と解するものあり、或は後世に遺したる事業及び精神的感化と云ふことを以て靈魂不滅を唱ふるものもある、斯の如き説は一寸聞た所では珍奇は珍奇なりと雖ども、後より熟察すれば、忽ち厭氣を催し來りて、到底吾人の深奥なる宗敎的情操を滿足せむしることは出來ぬもゝである、吾人の宗敎的情操

を滿足せしむるものは、如何しても吾人の意識に繼續がなくてはならぬ。

以上の靈魂不滅說は、予輩の意見とは申しながら、別に創見でも何でもない、唯ず佛敎の敎理を現今の術語を假用して、新らしく解釋を加へたる迄のことである、勿論片言隻語を捕へて觀れば、予輩の附け加へもあるかも知らねども、其位の事は仕方がない、現今の學術を利用して、古き敎理を解釋することは誠に面白いことである、是に付て解釋者の見識の加はりて行くことは、當然だと思ふ、但し靈魂不滅とは、現象的意識の來世に於ける繼續を意味すると丈は決して動かないのである、（佛敎の敎理に於て）彼の十二因緣說(Nidanas)は確かに此れを示して居る、予輩は斯かる意味にて靈魂不滅なることを信じて居るもので、同時に予輩の意見と成りて居る、尙ほ高敎を仰ぎ度いのである。

其四　靈魂不滅說に就て再び北村君に問ふ

石橋臥波

予は曩に北村君の靈魂不滅論に就て一二の疑團を記して說明を求めたりしに、最も精密なる說明を與へられ、君の論旨と信仰とが明かになれるのみならず、之によりて益を得ること多きは深く謝する所なり、されども尙疑ひの存するものあるにつき再び高敎を煩はさんとす。

第一　靈魂とは現象としての意識作用にして、因果の連鎖によりて流れを成し居る精神的現象其ものなり、唯だ佛敎にては因果の連鎖は未來迄も繼續すとなし、科學者は肉體組織の崩解と共に斷絕すとなす‖今暫く君の靈魂に於ける所信の大要を言ひあらはしたるものとして之を佛說に比較するに、靈魂といひ我といふものは前後連續して生

滅する意識現象にして實體にあらず、即ち過程なり、故に常住の我なく、昨の我は今の我にあらずとして無常無我の根本義を立し、而もこの生滅の間に因果の連絡を認め之を根本原理として、宇宙萬有を説明する に更に道德的意義を有する所の輪廻説を以てし、こゝに於てか靈魂は刹那々々に流れ去つて我なるものなきも、人の動作のみは永く其果を連續し、因となり果となり、生滅輪廻の本體をなすが故に、道德上に於ける個人の意義を認むることを得、而して人の動作活動は一面より見る時は輪廻生滅の本體にして、生滅に超越し輪廻を貫く道德的連鎖なりと云ふべし、これ佛説の大要にして、君の所謂現象的意識作用そのものとしての靈魂は、佛教に於ては未來までも繼續するとなすものとは異なる所あるが如し、知らず君の所謂佛説とは何れの時代に於けるものなるか、如何にしても現象的意識は個體の崩解と共に消滅せずして未

來にまで繼續すべしとは予は信ずること能はざるのみならず、この點に於ては心理學説と佛説とは一致せるものと斷言することを得んか、

第二　靈魂を現象的意識と斷じながら、生滅の間を連續する一種の潜勢力即ち力を持ち來りて、この力は佛教に所謂業種若くは習氣の如きものとし、之を假想せざる可らずとなし、未來に繼續して不滅なるものはこの力にして、實在の潜在的活動力なりとせるは矛盾といはざる可らず、何となれば靈魂にして實在とか眞如とかいふが如きものならば、滅不滅は問題となるべきものにあらずとして、殊更に現象的意識作用を以て靈魂なりとしながら、其不滅にして未來にまで連續するものは、顯在的意識にはあらずして實在の潜在的と見るべきものとしたればなり、想ふに君の初めに於ける靈魂てふ意義は現象的にして、後の不滅てふ意義の靈魂は實在的なるより、かゝる矛盾を來せるならんも、この

邊は更に説明を煩はさざるを得ず、且つ靈魂の不滅を純正哲學上より説明せざれば不可能なりとせば、君の實在論據の如何なるものなるかは聞かまほしきのみならず、本問題の説明には最も重要なることなるべし。

第三　實在てふ觀念を離れざる現象的意識ならでは不滅といふ可らず、但し靈魂不滅とは現象的意識の來世に繼續することは、佛敎の敎理に於て決して動かずといへる君の論旨には一致せざる所はなきか、現象的意識は現象的にして、之が實在てふ觀念を伴ふと否とによりて、滅不滅の別あるべきものにあらず、故に心理學者が現象として論究する意識とても、決して佛敎にいふ所の現象としての心と差別あるべきにあらず、即はち何れも一歩を進めて體を認めざるにはあらず、心理學は之を純正哲學に讓りて説明の材料を給するものにして、由來哲學といへば科學を繼子視せし僻見は、今日は已に消えて最も相近づき、思辨てふ界裡に深く高く隱れし哲學は、經驗の上に立つ自然科學の材料の上に座し、その進行の徑路は直線に歸せんとし、從つて物質と精神、主觀と客觀との限界も從來の如くならずして、ゼームスは精神活動は腦髓活動の函數なりとし、ヴントはすべての經驗は主觀客觀の共働產物にして、精神てふものは確實なる實際の存在物にあらずして、抽象的概念に過ぎずとなし、其他ラッツエンホーフユル、フイエーの如きも亦哲學上活動的一元論、而も事實的原理を唱ふるが如き、以てその傾向を見るべきなり。

且それ現象的意識の來世に繼續することは佛敎の敎理なりといふ君の所謂佛敎は何れをいへるものなるか、前にもいへる如く、輪廻の主體は羯磨即ち業にして靈魂は決して本體にあらず、過程なるが故に未來

のあるべき理なし、予輩の信ずる所によれば、佛教に於て不滅を説くは阿頼耶緣起業感緣起の方面にして、現象的意識の靈魂に就ては不滅を説かざること、現代心理學説と一致し、最も適切なるものとなすに君は飽迄體と用とを混同せるが如し、故に初めの現象的意識を靈魂なりとせば、宜しく不滅説を捨てざる可らず、後の實在的方面よりせんとせば現象的意識との別を明かにせざる可らず。

第四、君の論旨を推すに、靈魂とは實在（活動的）の顯現にして、その潜在的の習氣（精神的現象其物の力）によつて未來に連續するものにして、その習氣は物質的「エネルギー」に相當するも同一にあらずとなすにあるが如し、果して然るか、オツトワルドは嘗て精神勢力説を唱へ、フイエーは心即力（Idealforce）説を立てしが、思ふにこれらの説と同一なるべきか、精神勢力てふ説はシユルチエー氏も亦比較心理學に於て説明して、精

神を一の力と見る時は、死てふことは他の新しき形に變化すといふまでのことなりと曰ひ、ペルチユナン氏も亦意識にのらざる精神作用ありて之が後の世に傳はるものなれば、人はこれにより精神が不死なりといふことを得べしといへり、君もし佛説を解釋するに更にかゝる説を以て補ひなば、その信仰は最も予輩をして滿足せしむるものたるを得んか。

第五、以上記する所は、尚君の説明に疑ひの存する要點なるが、尚こゝに問はんとする所は、十二因緣説と世の學者の兒孫の繁榮感化を以て靈魂不滅とすといへることなり、君の説によれば現象的意識の續繼を十二因緣に如何に配して説かんとするか、現在の識は五蘊共に生滅するには非るか、一休禪師の「引きよせて結べば柴の庵にて、解くればもとの野原なりけり」といへる何は如何に解釋するか、且世の學者にして兒

孫の繁榮を以て靈魂の不滅を唱へしものあるは未だ予の聞かざる所、且つ精神的感化を以て靈魂不滅となしゝを耳にせず、これ或は未來の有無を言ひしならん、之を要するに君は創見に屬する所あるが如し、如何にもあれ、かゝる人生の重大なる疑問は只佛説にのみ拘泥すべきにあらず、信仰は人間の生活に缺く可らざるものなるも、さらばとて思辨的獨斷的なる可らず、現代の智識によりて説明し得らるゝ限りは之を自然科學に聞き、然る後に宇宙の全體より考察して、健全なる信仰を得んことを要求するは、現代一般の傾向なれば、君幸に示教の勞を吝むなかれ、予も亦疑義のある所は高教を仰ぐことを怠らざるべし。

其五

靈魂説に就きて再たび石橋君の質義に答ふ

北村　敎嚴

靈魂不滅論に關し、小生所信の梗概を披瀝して本紙に記載せしが、石橋君より度々懇篤なる質義を蒙れり、而るに此れは古來哲學宗教の最も重大なる問題にして、未だ滿足なる解釋を與へしものゝなきは頗る遺憾なり、然れども科學者の嚴格なる批評を受くるにも關はらず、尚此説を信ずるものゝ世間に多きは明なる事實にして、予輩も亦た宗教家の一人として、靈滅不滅及び佛陀の存在と云ふが如き概念を、到底腦裡より除却すること能はず、是れ或は先入主となりて浸潤久しきの結果なるやも識らざれども、最早予輩が一切の思想一切の行動が、此等の信仰によりて支配せらるゝ迄に成り居れり、世の學者或は之を以て獨斷的迷信なりと批評すべしと雖ども、兎に角斯かる信仰の予輩が腦裡に樹立せし以上は、説明の出來得る程度迄は、あらゆる手段を盡して説明したしと思へり、是を以て説明の巧拙によりて敢て予輩の信仰に增減す

み所なきことを、豫め貴下の念頭に置かれんことを切望して已まざるなり。

曩きに掲げられたる貴問は堂々たる長篇なるが、就中第四項に至りて――君の論旨を推すに霊滅とは實在（活動）の顕現にして、その潜在的の習氣（精神的現象其物の力）によりて未來に連續するものにして、その習氣は物質的エネルギー」に相當するも同一にあらずとなすにあるが如し、果して然るか――との御質義は最も能く鄙見の所存を領解せられたるものと謂ふべし、要するに小生現今の信仰は此れに過ぎざるなり、尚序にオツトワルド」等の説を列擧せられたれども、小生疎懶にして未だ諸氏の著書を披讀せしことなし、去りながら西洋の科學者にして斯かる説を主張することは珍とすべしとするも、東洋に於て古來論じ來りし所に比較して、如何程拙でし所あるか、予輩未だ識ること能はず、唯

だ用語の新奇なると、説明の形式の稍整頓せる位のことは之れあるべし、但し他日是非共此等の諸書を渉獵したしと思へり。

佛教の霊魂不滅説とは稱するものゝ、原始的佛教は識るに由なし、貴下の熟知せらるゝ如く、此の説の最も明瞭にせられたるは世親の時代なりとす、最も馬鳴以前、即ち佛滅後四五百年の間に、小乘佛教は數多に分岐せしが、其間にも夙に霊魂不滅説の存在せしことを認むるに難からざるなり、兎に角業種の作用によりて十二因縁の循環すと謂へる唯識論倶舎論の説を以て、佛教の霊魂不滅説を代表せしむるも差支なしと予輩は確信せり。

又た予輩が既に辨せしが如く、霊魂として執着すべき常住の我なるものゝ存在し居るべき筈はなし、唯だ生じては滅し、滅しては生じ、生滅輾轉して休息せざる所の意識作用を以て、便宜上霊魂とは名くるなり、去

れば是れ現象に相違なし、決して是れ實在（本體）にはあらず、此の如き現象が單に今生に於てのみ斷續するにはあらずして、死後に於ても必ず何等かの形式に變じて斷續すべしと思へり、予輩の信仰は即ち此の一事なり、但し斯の如き精神の斷續狀體が死後迄も連續すと云へばとて直ちに之れを實在なりと謂ふことを得ず、實在とは不生不滅の實體を指す概念なり、精神作用が吾人が千死萬死の後ち、千度萬度形式を變じて生滅作用を營むにもせよ、既に生滅を免かれざるものとすれば、則ち現象と謂つべきなり、現象とさへ謂へば、一世にて終るべき假體のみに限ると定むるは科學者の淺見にはあらざるか、たとひ千死萬死の後ちまでも繼續するとするも、刹那生滅を免かれざる限りは即ち現象に外ならざるなり、各の如き意義にて現象と云ふ概念を使用する以上は、現象としての意識作用は未來迄も繼續すと謂へばとて、決して撞着するこ

となしと思ふなり。

勿論現在の吾人は五蘊假和合なれば、早晩瓦解すべきものなることは明かなり、然かれども有爲轉變の原因とも看做すべき習氣なるものが、根本的に斷滅せられざる以上は、此の潛勢力は再たび前の五蘊を集合せしめ、以て後の我なるものを生せしむべし、現生に於ける五蘊が刹那々々に生滅しつゝあると同じく、現生最後の五蘊の瓦解する一刹那に、後生の五蘊の結合は始まるべし、去れば習氣が根本的に斷滅せられざる限りは、五蘊は生じては滅し、滅しては生じて、永久に息むことなきなり、此れを迷の境界と謂ふなり。然り而して宗教の目的は轉迷開悟に在り、斯かる習氣は如何にして斷滅せらるべきかと云ふことは佛教の根本問題となりしなり、此の習氣を斷滅せしむるものは哲學にもあらず科學にもあらず、常識にもあらず、唯だ絶對不思議の力に投託せる金剛

不壊なる大信仰の力なり。

既に此の不思議力によりて習氣を拂ひ盡して觀れば、別に執着すべき五蘊もなく、我もなきことが體得せらるるなり、貴下が曩きに示されたる一休禪師の「引きよせて結べは柴の庵にて、解くればもとの野原なりけり」云々の道歌は、右の如き悟道の境界を披瀝せしものに相違なかるべし、悟道の境に住して宇宙を達觀すれば實に斯の如き感想の生じ來たるなるべし、此の妙境は早や既に佛陀に私淑せしものなり、吾人とても、絶對不思議の信念力によりて迷の根本を退治することを得ば、現生の終るや否や即ち假和合の假我なるものゝ生滅は忽ち斷絶せられて、無爲安樂の妙境に歸入すべし、以上の如き道歌は、自己信念の表白なれば、宜しく宗教的信念の立場より解釋すべきものにして、科學や常識を以ては判斷すべからざるものと思ふなり。

倘最後に一言致したきことあり、神の存在とか、靈魂不滅とか申すことは宗教的信念の上に樹立せるものなれば、飽迄論理的に説明し盡すことは不可能のことゝ思ふ、是れは「カント」も既に明言せし所なり、科學者は充分なる説明を得て而る後ちに信仰せんと欲すれども、宗教家は信念の上に腰を据えて而る後ちに説明を試みんと欲するなり、故に説明の功拙可否の如きは、宗教家に取りては、抑も末技に屬せり、科學者の批評によりて忽ちに動搖するが如き信念は甚だ覺束なきものなり、宇宙の秘奥は到底科學や哲學のみにては把柱することは能はざるは貴下の既に是認せらるゝ所に似たり、去りながら宗教家も、先德の糟粕にのみ依賴せずして、嶄新なる哲學や科學を利用して自家の信念の説明に資すること最も重要なり但し是れは自家の信念確立以後の事に屬するなり、尙貴下は夙に斯かる形而上問題に思想を鍛錬せられしことなれ

ば多分蘊蓄も深からん、餘閑あらば、更に高教を仰ぎたし。

其六

靈魂說に就きて北村君に呈す

石橋臥波

曩に北村君の靈魂論に就いて疑義の存する處を質すこと二回なりしに、常に詳細なる解答を與へられしは深く謝する處なり、然るに最後の高論に於けるものは、君の信仰を最とも明かにせらるゝと共に、論旨も亦終極に近づきしを信ずるが故に、予も聊かこゝに最後の挨拶にかへて所信を述べんとす、君の言はるゝ如く靈魂論は古來困難なる問題にして、今尙容易に解決を見ること能はず、そは當然の事にして、もしこの靈魂の本質が明かになれる曉には、宇宙の解釋も人生の意義も悉く解決せられて恰も朦々たる雲霧晴れて玲瓏たる明月を眺むるが如くなるを得べきなり。

『蓋し宇宙の解釋についても、其困難なる點は何れにあるかといへば、必竟物質と靈魂との起原本質關係にあり、而して從來これを解釋せんとするに經驗の道筋をたどるものと、思辨の上よりするものとの二派ありて、更に信仰によりて觀念せんとするものあり、即ち一の對象にてありながら、見る人は各その見方を異にし、一人の娘に三人の婿、何れの掌中に皈すべきか、一は常識によりて最も正確なる彼の言葉動作、さてはレッターによりて彼の意中を探らんとし、一は冷靜なる意志の要求を充さんとし、他は自ら熱せる情を以て彼の意を推す、果して何れに心を寄するか是を判するに智言を以てすると、信を以てするとは、其人の性情の異なるによりて自ら異ならざるを得ず。』

凡て人の心は智と情との二極點間に於て波動的活動をなし、意志は常